

茨城県教育財団文化財調査報告第260集

# 上岩瀬富士山遺跡

17国補道改第17-03-068-0-053号  
埋 藏 文 化 財 調 査 報 告 書

平 成 18 年 3 月

茨城県常陸大宮土木事務所  
財団法人 茨城県教育財団







茨城県教育財団文化財調査報告第260集

かみ いわ せ ふ じ やま

# 上岩瀬富士山遺跡

17国補道改第17-03-068-0-053号  
埋 藏 文 化 財 調 査 報 告 書

平 成 18 年 3 月

茨城県常陸大宮土木事務所  
財団法人 茨城県教育財団



## 序

一般国道118号は、水戸市を起点として、福島県会津若松市に至る総延長211kmに及ぶ広域的な幹線道路であり、産業・経済活動を支える動脈として極めて重要な路線であります。

しかしながら、近年、常陸大宮市の市街地は慢性的な交通渋滞が発生しております。那珂～大宮バイパス整備事業は、この交通渋滞を解消していくとともに、周辺住宅環境の向上等を目的として、計画されたものです。この事業予定地内には、埋蔵文化財包蔵地である上岩瀬富士山遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県常陸大宮（旧大宮）土木事務所から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、平成17年1月から平成17年2月にかけて発掘調査を実施しました。

本書は、上岩瀬富士山遺跡の調査成果を収録したもので、本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県常陸大宮土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、常陸大宮市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、感謝の意を表します。

平成18年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 稲葉節生



## 例　　言

1 本書は、茨城県常陸大宮（旧大宮）土木事務所の委託により、財團法人茨城県教育財團が平成16年度に発掘調査を実施した、茨城県常陸大宮市泉551番地15ほかに所在する、<sup>かみいわき おおみや</sup>上岩瀬富士山遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査機関及び整理期間は以下のとおりである。

調　　査　　平成17年1月1日～平成17年2月28日

整　　理　　平成18年1月1日～平成18年3月31日

3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長　　荒井　保雄

主任調査員　　柳　　雅彦

主任調査員　　渡邊　浩実

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長大森雅之のもと、主任調査員渡邊浩実が担当した。

## 凡 例

1 地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X軸 = +58,320.0m, Y軸 = +53,600.0mの交点を基準点（A 1 a1）とした。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1 区」、「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c…j、西から東へ1, 2, 3…0とし、名称は大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」、「B 2 b2区」のように呼称した。

2 本文・実測図・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 S I - 住居跡 S K - 土坑 S D - 溝跡 F P - 炉跡 S A - 横跡 P G - ピット群  
K - 扰乱

遺物 T P - 拓本記録土器 D P - 土製品 Q - 石器・石製品  
土層 K - 扰乱

3 土層と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

4 遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は300分の1、遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
- (2) 遺物は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々に縮尺をスケールで表示した。
- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

■ 燃土 ■ 炉・火床面  
●上器 ○土製品 □石器・石製品 硬化面 —— 削平 + + +

5 遺物観察表及び遺構一覧表の表記については、次のとおりである。

- (1) 現存値は（ ）で、推定値は〔 〕を付して示した。遺物観察表の計測値の単位はcm, gで示した。
- (2) 遺物観察表の備考欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。
- (3) 土坑一覧表の中の深さについては、最深部の計測値を示した。

6 「主軸」は、炉を持つ竪穴住居跡については炉を通る軸線とし、他の遺構については、長軸（長径）を主軸とみなした。「主軸・長軸（長径）方向」は、その主軸が座標北から見て、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E）。

## 抄 錄

# 目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 縄文時代の遺構	8
2 弥生時代の遺構と遺物	8
(1) 積穴住居跡	8
(2) 土坑	26
(3) 炉跡	29
3 その他の遺構と遺物	30
(1) 土坑	30
(2) 溝跡	33
(3) 横跡	35
(4) ピット群	35
(5) 遺構外出土遺物	37
第4節 まとめ	38
写真図版	

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県は、常陸大宮市上岩瀬地区において、一般国道118号（那珂～大宮バイパス）整備事業を進めている。平成12年7月17日、茨城県大宮土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道118号（那珂～大宮バイパス）整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、平成16年10月20日に現地踏査を、平成16年10月26日、29日に試掘調査を実施した。平成16年11月2日、茨城県教育委員会教育長から茨城県大宮土木事務所長あてに、事業地内に上岩瀬富士山遺跡が所在する旨回答した。

平成16年11月5日、茨城県大宮土木事務所長から、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の第3項の規定に基づき、土木工事等についての通知が提出された。平成16年11月10日、茨城県教育委員会教育長から茨城県大宮土木事務所長あてに、事業の変更もしくは記録保存のための発掘調査等が必要であるとし、工事着手前に発掘調査等を実施するよう通知した。

平成16年11月16日、茨城県大宮土木事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、一般国道118号（那珂～大宮バイパス）整備事業に係わる埋蔵文化財発掘調査等の実施について協議書が提出された。平成16年11月25日、茨城県教育委員会教育長から茨城県大宮土木事務所長あてに、上岩瀬富士山遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財團法人茨城県教育財團を紹介した。

茨城県と財團法人茨城県教育財團は、茨城県大宮土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成17年1月1日から平成17年2月28日にかけて、上岩瀬富士山遺跡の発掘調査を実施することとなつた。

## 第2節 調査経過

調査は、平成17年1月1日から平成17年2月28日まで実施した。以下、その概要を表で記載する

工程	期間	1月	2月
調査準備 表土除去 遺構確認			
遺構調査			
遺物洗浄 注記作業 写真整理			
補足調査 収集			

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

上岩瀬富士山遺跡は、茨城県常陸大宮市泉551番地15ほかに所在している。

常陸大宮市は、茨城県の北部に位置し、北は大子町、東は常陸太田市、南は那珂市・城里町、西は栃木県に接している。地形的に見ると、八溝山に源を発して南流する久慈川と栃木県那須連山に源を発して流れる那珂川の二つの大きな川に挟まれた丘陵と台地上に位置している。全体的に地形は北部地域が高く南部が低い。台地の中央部には北塙子小貝野の燧石山と旧山方町長田の羽出庭を水源とする玉川が流れおり、その台地を二分して、下岩瀬で久慈川に合流している。また、これらの丘陵や台地は久慈川、那珂川、玉川、緒川によって作りあげられた段丘構造を示してゐる。上位段丘は標高70~120m前後で、旧緒川村・旧美和村境界付近の地域であり、中位段丘は標高30~70m前後の久慈川西岸、那珂川東岸と常陸大宮市街の台地であり、下位段丘は標高15~30m前後の那珂川、久慈川、玉川、緒川流域の沖積低地である<sup>1)</sup>。

上岩瀬富士山遺跡は、常陸大宮市の南端、久慈川と玉川の合流地点に向かって突出する長さ約7km、幅約700mほどの中位段丘の先端に位置し、約46mの標高を有する台地上に立地している。調査前の現況は山林及び畠地である。

### 第2節 歴史的環境

常陸大宮市は、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在している。当市は、久慈川・那珂川をはじめとした水利に恵まれており、久慈川と那珂川に挟まれた台地は、古代から人々が生活を営む場としては絶好の舞台となってきた。ここでは、上岩瀬富士山遺跡周辺の主な遺跡について時代を追って述べることにする。

旧石器時代の遺跡は、櫛巾遺跡<sup>2)</sup>や小野天神前遺跡<sup>3)</sup>があり、槍形尖頭器や細石刃石核が出土している。縄文時代の遺跡は約40カ所あるが、時期的には早・前・晚期は少なく、中・後期の比較的規模の大きな遺跡が目立ち、久慈川と那珂川に面した丘陵状の台地縁辺部に多く見られる。久慈川右岸には坪井上遺跡<sup>4)</sup>(4)、宮中遺跡があり、那珂川左岸では小野天神前遺跡、高ノ倉遺跡等が代表的な遺跡である。坪井上遺跡からは、新潟県糸魚川市の姫川流域で産出される翡翠で作られた大珠5点が出土している。また、袋状土坑からは火炎系の土器が出土しており、新潟県の信濃川中流域を中心とする馬高系式の土器や大珠と共に北陸地方との交易を考察する上で貴重な資料である。その他には、櫛巾遺跡、諏訪台遺跡<sup>5)</sup>、坪井上遺跡、三美遺跡、下坪遺跡、上宿坪遺跡<sup>6)</sup>(11)、大塚遺跡<sup>7)</sup>(12)、小中道遺跡<sup>8)</sup>(13)、北村田遺跡<sup>9)</sup>(15)等がある。

弥生時代の遺跡は、久慈川沿いに小祝・後田B道遺跡、櫛巾遺跡、富士山遺跡<sup>10)</sup>(2)、糠塚遺跡、薦葉犬道遺跡、坪井上遺跡、那珂市の瓜連城跡<sup>11)</sup>(21)等があり、那珂川沿いには三美遺跡、小野天神前遺跡、高ノ倉遺跡等がある。ほとんど後期後半の遺跡であるが、中期の小野天神前遺跡では、再葬墓跡が検出され、人面付壺形土器が3点出土している。一遺跡から3点の人面付壺形土器が出土することは大変に珍しく一遺跡一点がほとんどである。小野天神前遺跡からは住居跡は確認されなかった。後期後半に入り、調査が行われた遺跡が増えてくる。当遺跡から北7.5kmの久慈川右岸の台地上に櫛巾遺跡がある。大賀小学校校舎建設に伴い調査が行われ、昭和60年3月に「茨城県櫛巾遺跡 大賀小学校校舎に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」が発刊されている。調

査の結果、堅穴住居跡2軒が検出されている。隣接する遺跡には、坪井上遺跡、富士山遺跡がある。富士山遺跡は、茨城県労働者住宅生活協同組合の宅地造成に伴って昭和51年8月に調査が実施され、同54年3月に「富士山遺跡調査報告書」が発刊されている。調査の結果、堅穴住居跡9軒と土坑墓3基が検出されている。また、坪井上遺跡では、ショッピングセンター建設に伴い平成8年3月に調査が実施され、平成11年10月に「常陸大宮坪井上遺跡 大宮ショッピングセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」が発刊されている。調査の結果堅穴住居跡2軒が検出されている。多くの遺跡の発掘から、この台地が当時の弥生人にとって生活の場として好条件を備えていたことがうかがえる。

古墳時代の遺跡は、集落遺跡としては梶巾遺跡と下村田遺跡<sup>9) (5)</sup>がある。久慈川右岸に位置する梶巾遺跡からは、前・中期の住居跡4軒が調査されている。また、玉川左岸の低位な丘陵に位置する下村田遺跡は、当財団によって調査が行われ、後期の住居跡7軒が確認されている。その他調査はされていないが、小祝宿遺跡、小祝馬場先遺跡、東平遺跡、西坪井遺跡、三美根岸遺跡など多くの遺跡がある。出現期古墳として考えられている富士山古墳群<sup>(3)</sup>に前方後円墳である富士山4号墳があり、県内でも最も古い古墳の一つと考えられている。中期の古墳としては、同古墳群の五所皇神社裏古墳、糠塚古墳等の大型古墳がみられる。五所皇神社裏古墳は全長60mの前方後円墳、糠塚古墳は全長90mの前方後円墳である。後期の古墳としては一騎山古墳群<sup>(17)</sup>、岩崎古墳群、鷹巣古墳群、小祝古墳群、富士山古墳群などがあり、そのほとんどが円墳である。一騎山古墳群は、10基の古墳からなり、4号墳は6世紀後半の小規模な前方後円墳で、人物、動物等の形象埴輪や円筒埴輪が出土している。

奈良・平安時代の遺跡は、鹿島遺跡<sup>(1)-(2)</sup>、上村田小中遺跡<sup>(3)</sup>、北野中道遺跡、源氏平遺跡<sup>(4)</sup>、一騎山古墳群、春日神社前遺跡<sup>(8)</sup>、北村田遺跡、前三ヶ尻A遺跡<sup>(16)</sup>、後三ヶ尻A-B遺跡<sup>(14)</sup>、西坪井遺跡、堂山A遺跡<sup>(18)</sup>等がある。そのうち、鷹巣遺跡では8~10世紀の堅穴住居跡32軒、掘立柱建物跡2棟が確認され、堅穴住居のかまどから再利用された瓦が出土し、台地斜面に約10基の瓦窯が存在したと予想されている。また、「西口」、「高倉」等と墨書きされた土器も出土している。上村田小中遺跡では、9~10世紀の堅穴住居跡17軒が検出され、「千万」、「郷」、「丈」及び「曹」等の墨書き土器や「丈」字の烙印が出土し、丈部氏の関連集落と考えられている。源氏平遺跡では、19軒の堅穴住居跡、掘立柱建物跡1棟が検出され「□□鳥取文功」、「□□鳥部鳴」の文字が刻まれた瓦や、「土坂倉」と墨書きされた土師器壺、内側には漆紙文書「解」が付着したものが出土地している。

中世の遺跡は、宇都野城跡<sup>(10)</sup>、前小屋館跡<sup>(9)</sup>、岩瀬城跡<sup>(6)</sup>等の城館跡や三美的備蓄銭出土があげられる。三美的備蓄銭は、合計3,929枚出土し、全て中国銭（渡来銭）である。鑄造期間が判明したのが2,659枚あり、乾元重寶などの唐銭、皇宋通寶などの宋銭、正隆元寶などの金銭、至大通寶などの元銭、永樂通寶などの明銭が全体の13%含まれている。この番銭の最後が織田信長から豊臣秀吉の時代であることが分かった。

※文中の〈 〉内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

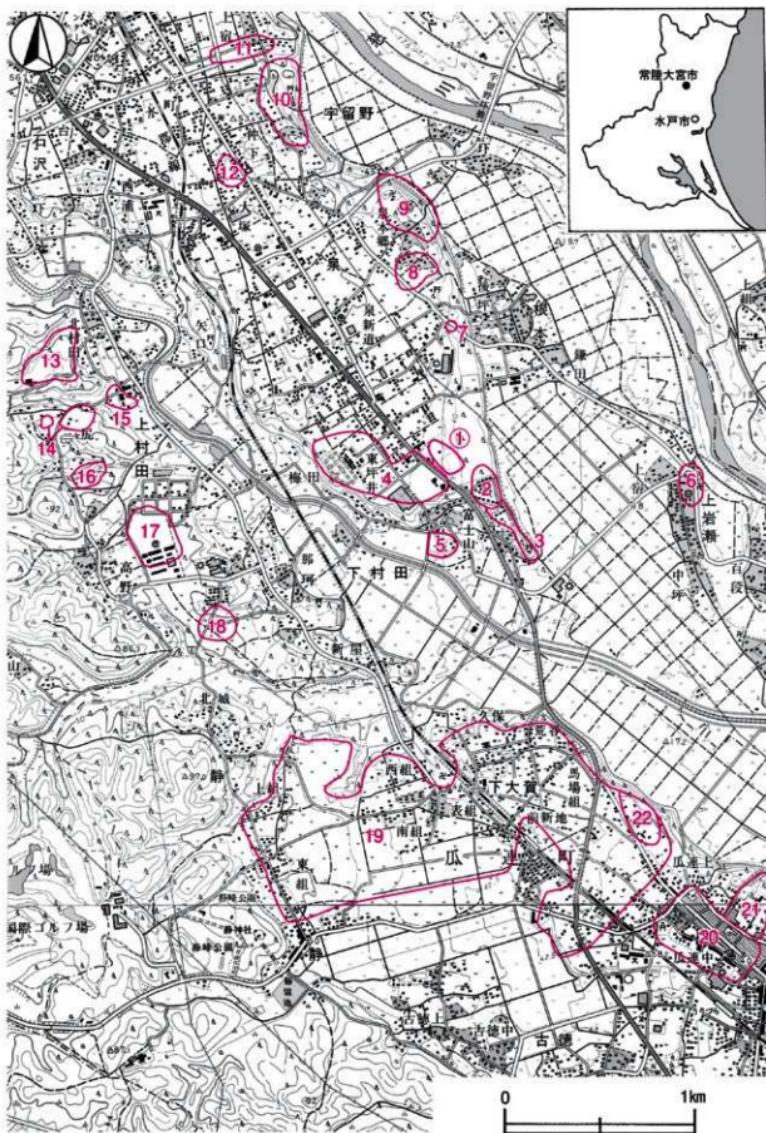
## 註

- 1) 大宮町史編さん委員会「大宮町史」 大宮町 1977年3月
- 2) 井上義安ほか「茨城県梶巾遺跡 大賀小学校校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 大宮町教育委員会 1985年3月
- 3) 阿久津 久「茨城県大宮町小野天神前遺跡〔資料編〕」「学術調査報告書1」 茨城県立歴史館 1978年3月
- 4) 千種重樹「常陸大宮坪井上遺跡 大宮ショッピングセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 坪井上遺跡発掘調査会 1999年12月
- 5) 井上義安ほか「源訪台遺跡」 大宮町源訪台遺跡発掘調査会 2001年3月

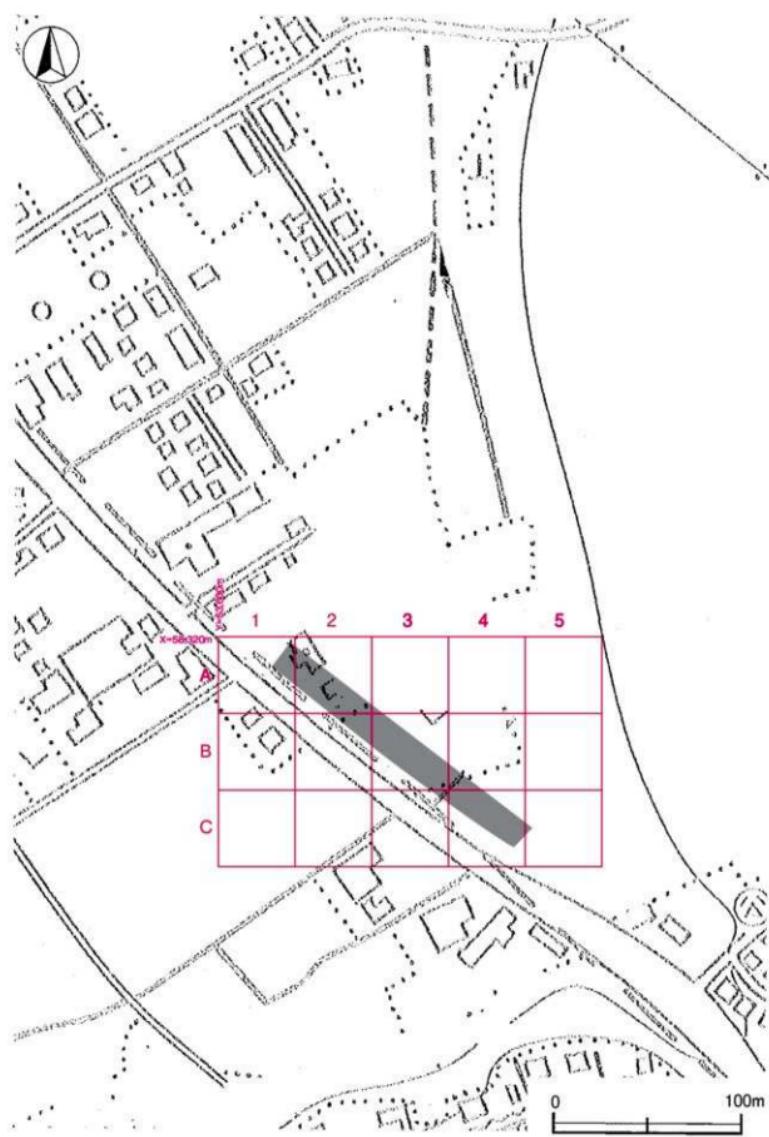
- 6) 小川和博・大瀬淳志「茨城県那珂郡大宮町 上宿上坪遺跡 発掘調査報告書」大宮町教育委員会ほか 2004年3月  
 7) 井上義安「富士山遺跡発掘調査報告書1」大宮町教育委員会 1979年8月  
 8) 加藤雅美ほか「瓜連城跡地内埋蔵文化財発掘調査報告書 No1～No4地点」「瓜連町文化財調査報告」1996年3月  
 9) 荒井保雄「一級河川玉川改修工事地内埋蔵文化財調査報告書 下村田遺跡」「茨城県教育財团文化財調査報告書」第110集 1996年3月  
 10) 高根信和ほか「常陸騎山」大宮町教育委員会 1974年3月  
 11) 外山泰久ほか「常陸鹿果遺跡 第1次調査」大宮町教育委員会 1983年3月  
 12) 井上義安ほか「常陸鹿果遺跡 第2次発掘調査報告書」大宮町教育委員会 1987年12月  
 13) 大宮町教育委員会「上村田小中道跡」大宮町教育委員会 1988年3月  
 14) 那珂郡大宮町教育委員会ほか「常陸源氏平 一那珂郡阿波郷丈部里比定地に於ける集落跡の調査— 道構造物」水戸北部中核工業団地内埋蔵文化財発掘調査会 1985年3月  
 15) 大宮町歴史民俗資料館「大宮の考古遺物 那珂・久慈の清流にはぐくまれた大宮町の先史・古代」大宮町教育委員会 1995年10月

表1 上岩瀬富士山遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中世
①	上岩瀬富士山遺跡	○	○					12	大塚遺跡	○			○		
2	富士山遺跡		○					13	小中道跡				○		
3	富士山古墳群		○	○				14	後三ヶ尻A B遺跡	○		○	○		
4	坪井上遺跡	○	○	○	○			15	北村田遺跡	○		○	○		
5	下村田遺跡		○	○	○			16	前三ヶ尻A遺跡				○		
6	岩瀬城跡	○		○	○			17	一騎山古墳群			○	○		
7	根本古墳群			○				18	堂山A遺跡		○	○	○		
8	春日神社前遺跡			○	○			19	下大賀遺跡	○	○	○	○	○	
9	前小屋館跡				○	○		20	瓜連遺跡	○	○	○		○	
10	宇留野城跡					○		21	瓜連城跡		○	○		○	
11	上宿上坪遺跡	○		○	○	○		22	十林寺古墳群			○			



第1図 上岩瀬富士山遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院「常陸大宮」1:25,000）



第2図 上岩瀬富士山遺跡周辺遺跡地区設定図

## 第3章 調査の成果

### 第1節 遺跡の概要

上岩瀬富士山遺跡は、常陸大宮市の南端に位置し、標高46~47mの中位段丘に立地している。調査面積は2,335m<sup>2</sup>で、縄文時代から弥生時代の複合遺跡である。

今回の調査で確認された遺構は、縄文時代の陥穴1基、弥生時代の竪穴住居跡7軒、土坑3基、炉跡1基、時期不明の土坑24基、溝跡4条、柵跡2条、ピット群2か所である。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に17箱出土しており、大半は弥生時代の広口壺(十王台式)である。主な遺物は、竪穴住居跡から出土した弥生土器(高环・広口壺・ミニチュア土器)、土製品(有孔土鍾・垂飾カ・勾玉・紡錘車)、石器・石製品(石鏃・砥石・小玉・炉石)などである。

### 第2節 基本層序

調査区北西部(A218)にテストピットを設定し、深さ2mまで掘り下げて基本層序の観察を行った。土層は10層に分層された。その観察結果は以下のとおりである。

第1層は黒褐色を呈する耕作土層である。層厚は10~25cmである。

第2層は暗褐色の表土層で、ローム粒子・炭化粒子・砂粒・赤色粒子・白色粒子を微量含んでいる。層厚は5~10cmである。

第3層はにぶい赤褐色の今市・七本桜軽石層で、赤色粒子を中量、ローム粒子・砂粒を少量、白色粒子を微量含んでいる。層厚は6~11cmである。

第4層は褐色のソフトローム層で、ローム粒子を中量、砂粒・白色粒子を微量含んでいる。層厚は15~32cmである。

第5層は褐色のソフトローム層で、ローム粒子を多量含んでいる。層厚は17~40cmである。

第6層は褐色のハードローム層で、ローム粒子を多量、砂粒を微量含んでいる。層厚は13~25cmである。

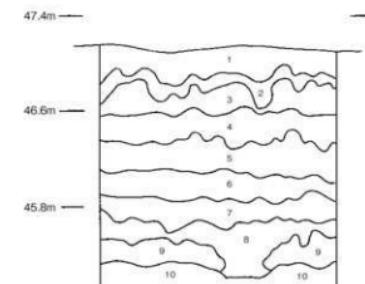
第7層はにぶい褐色のハードローム層でローム粒子を多量、砂粒を微量含んでいる。層厚は8~28cmである。

第8層は褐色の鹿沼バミス層の漸移層でローム粒子を多量、鹿沼バミス粒子を少量含み、締まりは強い。層厚は3~27cmである。

第9層は橙色の鹿沼バミス層で、締まりは強い。層厚は13~20cmである。

第10層は褐色のハードローム層で、鹿沼バミス粒子を微量含んでいる。以下、未掘のため層厚は不明である。

遺構は、第3層の上面で確認された。



第3図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 繩文時代の遺構

平面形が楕円形で深い掘り込みを有する土坑1基を確認した。この遺構は、遺物が出土していないため時期の判断をすることが困難であるが、形状や立地条件などから縄文時代の陥し穴と判断した。以下、遺構の特徴について記述する。

第1号陥し穴（第4図）

位置 調査区の中央部A 2 d6区で、標高47mほどの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.66m、短径1.26mの楕円形で、長径方向はN-41°-Eである。深さは82cmで、断面は逆台形状である。底面は平坦で、壁は緩やかに反りながら立ち上っている。

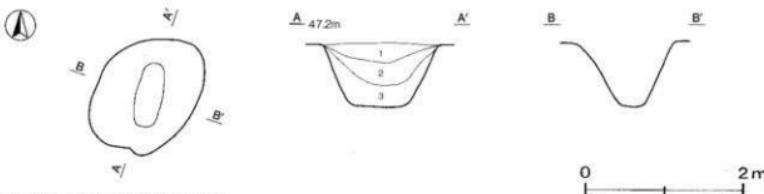
覆土 3層からなる。全体的に固く締まった土層で、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量
2	暗褐色	ローム粒子中量

3	褐色	ローム粒子多量
---	----	---------

所見 時期は、出土土器がないが、形状や覆土の締まりから、縄文時代と考えられる。



第4図 第1号陥し穴実測図

#### 2 弓生時代の遺構と遺物

遺構は、竪穴住居跡7軒、土坑3基、炉跡1基が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

##### (1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第5・6図）

位置 調査区の東部C 4 d8区で、標高46mほどの台地の緩やかな斜面部に位置している。

規模と形状 長軸4.47m、短軸4.10mの隅丸方形で、主軸方向はN-48°-Eである。壁高は24~36cmで、外傾して立ち上っている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部から北東寄りに位置している。長径68cm、短径35cmの楕円形で、床面を5cmほど皿状に掘り込んだ地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

1	極褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量
2	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量

4	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
5	暗赤褐色	焼土粒子多量
6	暗褐色	焼土粒子微量

ピット 6か所。P1～P4は深さ29～48cmで、形状と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ34cmで、炉と対面する南西壁寄りに位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ31cmで、性格は不明である。

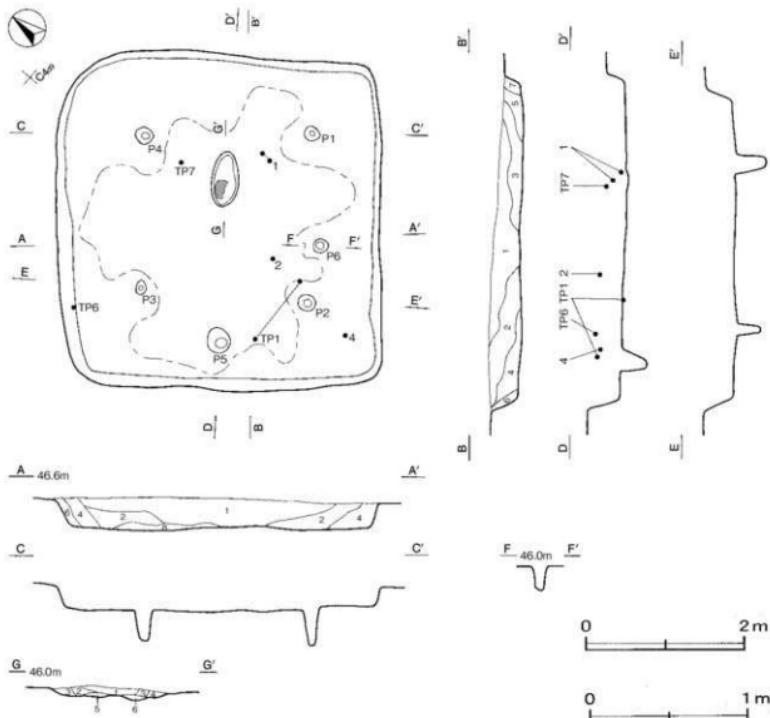
覆土 8層からなり、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

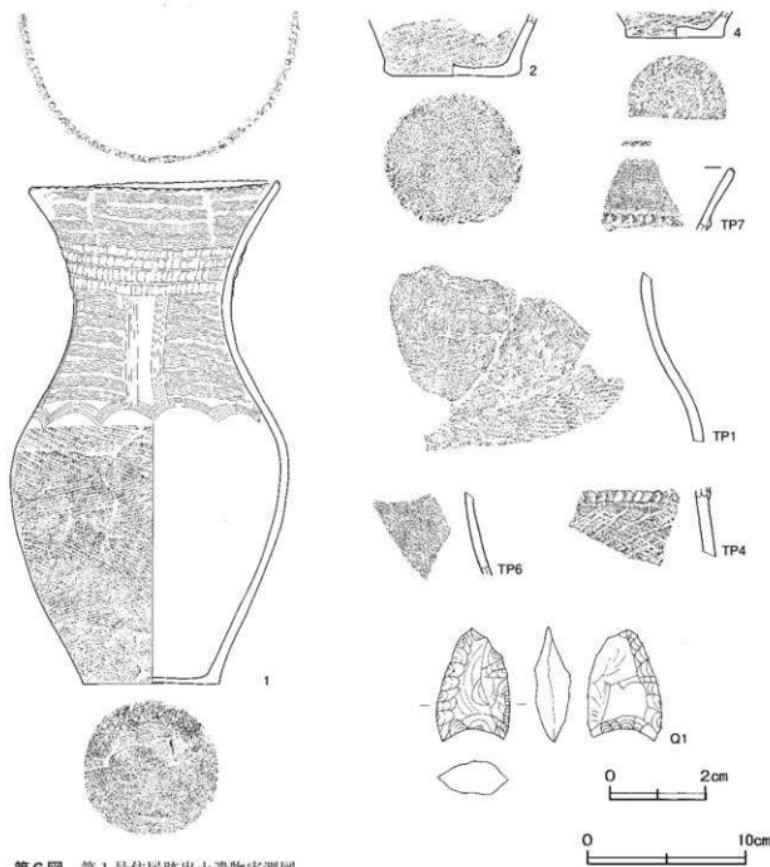
1 黒 色	燒土粒子・白色粒子微量	5 黒 色	ロームブロック微量
2 黒 色	ローム粒子・砂粒・白色粒子微量	6 黒 色	ローム粒子微量、燒土粒子微量
3 黒 色	ローム粒子微量	7 黒 色	ロームブロック・燒土粒子微量
4 黒 色	ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量	8 細 色	ロームブロック・燒土粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片282点(広口壺)が、床面から覆土上層にかけて散在する状況で出土している。1は炉東部の覆土下層から横位で、TP1は南のコーナー部の上層と床面の土器片が接合したもので、2・4、TP6・TP7は覆土上層からそれぞれ出土している。また、流れ込みと考えられる石器1点(石鏃)も出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半(十王台式期)と考えられる。



第5図 第1号住居跡実測図



第6図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第6図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	15.4	32.0	8.6	石英・長石	にぶい黄橙	普通	(口部上面に付加繩を割転押圧、口辺部繩面状工具(5本)による波状文、頭部上位に軽い押圧のある日本式縄文、縄痕状工具による縦区画(5分割)内に光沢波状文、頭部下位に同工具による下向き連弧文、側部付加条二側に上る羽状縞文、底部砂目痕)	下層	90% PL4
2	弥生土器	広口壺	-	(39)	8.5	石英・長石・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	側部、付加条二側縄文抽文	上層	10%
4	弥生土器	広口壺	-	(1.6)	6.2	石英・長石	橙	普通	側部、付加条二側縄文抽文	上層	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP1	弥生土器	広口壺	石英・長石・赤色粒子	灰褐色	普通	擦出状工具(5本)による縦区画内に充填波状文 鋸部、付加条二種文埴文	上層・床面	
TP4	弥生土器	広口壺	長石・雲母	にぼい黄橙	普通	擦出、軽い押圧のある1条の隆起 鋸部、付加条二種によ る羽状文	覆土中	
TP6	弥生土器	広口壺	石英・長石・雲母	灰黄褐色	普通	鋸部、擦出状工具(4本)による縦区画内に充填波状文	上層	
TP7	弥生土器	広口壺	石英・長石	にぼい橙	普通	1引張部、上面に付加条を斜軸押圧、口辺部、擦出状工具(5本) による波状文 頭部上位に軽い押圧のある1本の隆起	上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	石器	2.4	1.5	0.7	2.42	チャート	基部中央は済入	覆土中	PL.6 流れ込み

## 第2号住居跡 (第7~10図)

位置 調査区の東部C 4 b6区で、標高46mほどの台地の緩やかな斜面部に位置している。

規模と形状 長軸4.69m、短軸4.65mの隅丸方形で、主軸方向はN-12°-Eである。壁高は10~28cmで、外傾して立ち上がっている。

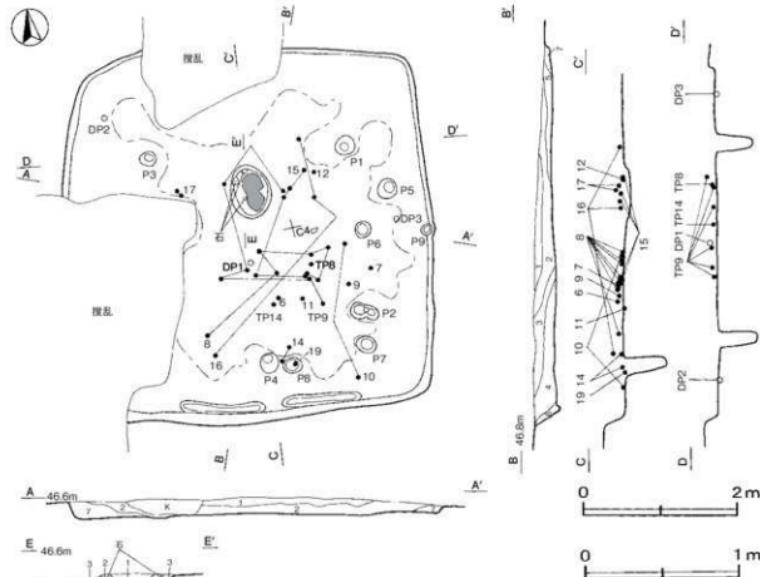
床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が南壁際の一部のみ確認された。上幅は10~15cmで、深さは最大8cmで、断面形はU字状を呈している。

炉 中央部からやや北に位置している。長径72cm、短径54cmの楕円形で、床面を10cmほど皿状に掘り込んだ地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化し、炉内から火熱を受けた同一個体の炉石が割れた状態で出土している。

### 炉土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量  
2 暗褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量

3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量



第7図 第2号住居跡実測図

**ピット** 9か所。P1～P3は深さ40～49cmで、形状と配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ52cmで、炉と対面する南壁寄りに位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5～P9は深さ9～47cmで性格は不明である。

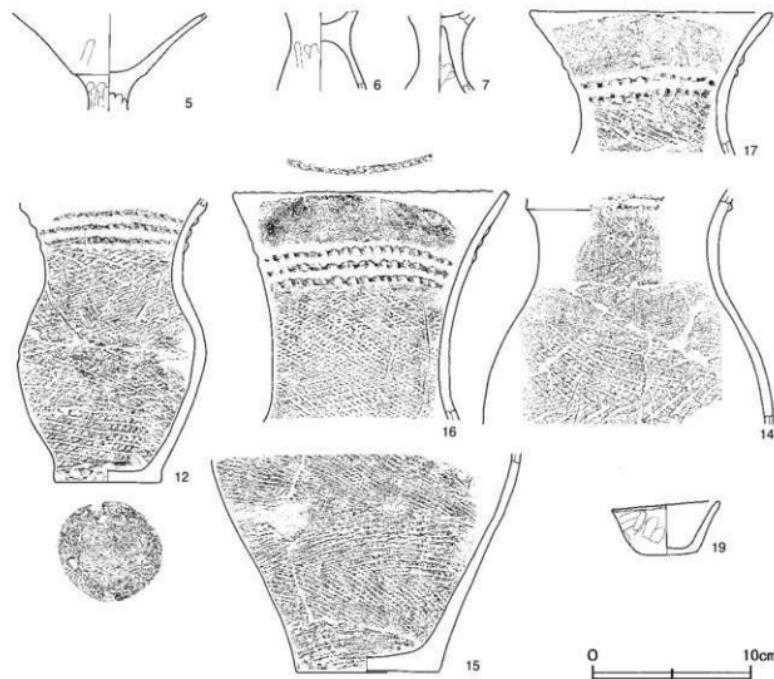
**覆土** 7層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

**土層解説**

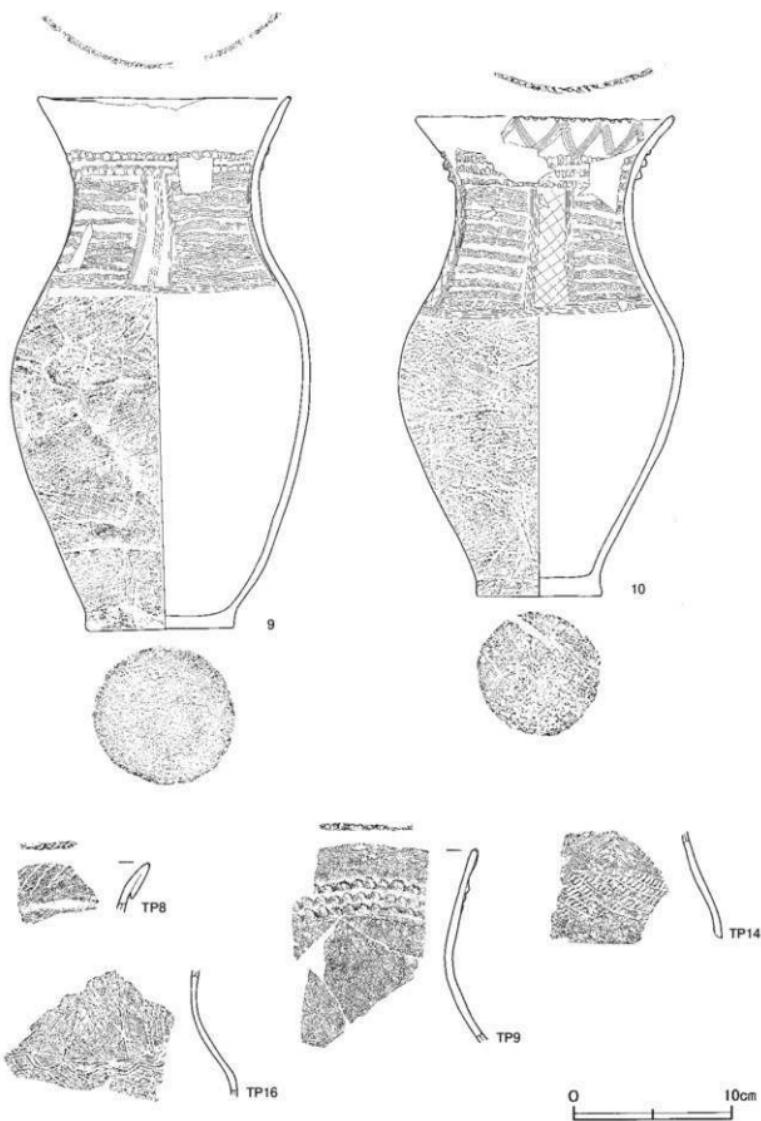
1 黒褐色	ローム粒子微量	5 黒褐色	ロームブロック微量
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・白色粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	7 黒褐色	ロームブロック少量
4 黒褐色	灰化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量		

**遺物出土状況** 弥生土器片1,331点（高坏17、広口壺1,313、ミニチュア土器1）、土製品9点（勾玉1、紡錘車8）、炉石1点が出土している。遺物は、東部から南部にかけての覆土下層から上層にかけて集中して出土し、廃絶後に投棄されたものと考えられる。10は南壁際の床面から横位で、11は炉の南側の床直上に横位でつぶれた状態で出土している。DP2は北西壁際、DP3は東壁際の床面。6～9・12・14・15・19、TP14は覆土下層、DP1は中央部の覆土中層、TP8・TP9はいずれも覆土中層から上層にかけて出土している。炉石は火熱を受け3分割して炉内から出土している。

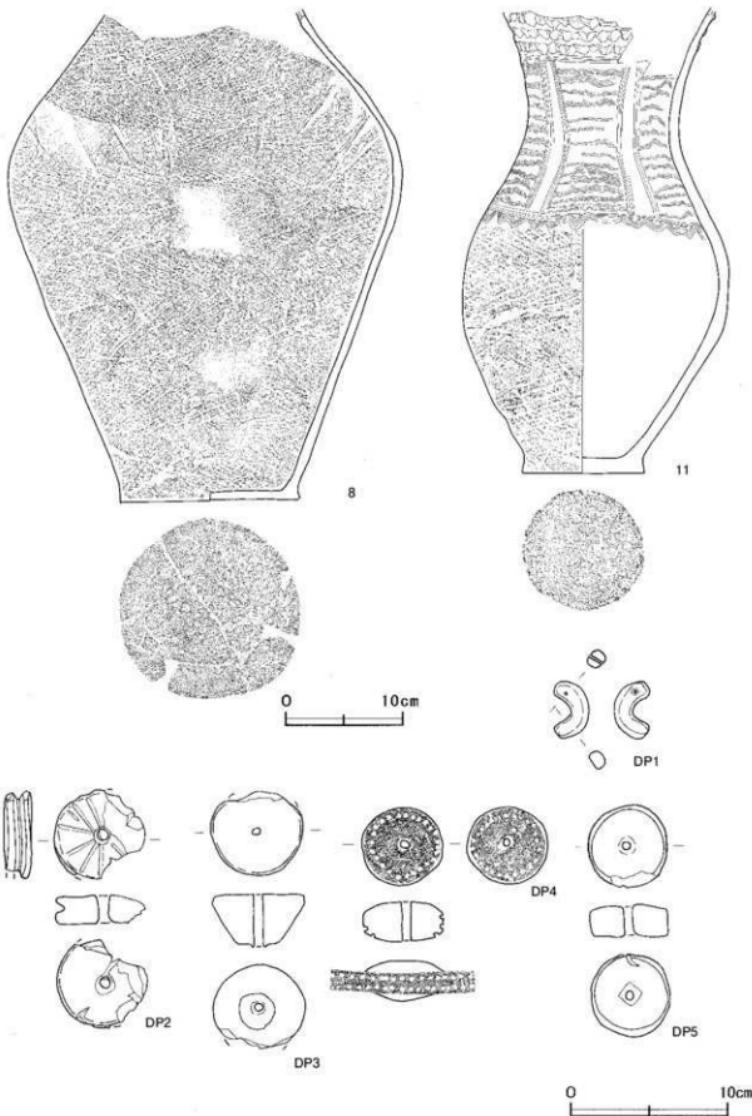
**所見** 時期は、出土土器から後期後半（十王台式期）と考えられる。



第8図 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



第9図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)



第10図 第2号住居跡出土遺物実測図(3)

第2号住居跡出土遺物観察表（第8～10図）

番号	種 別	器 種	口径	器高	底坪	胎 土	色 調	焼成	文 様・手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
5	弥生土器	高杯	-	(6.2)	-	石英-長石-雲母-赤色粒子	明黄褐	普通	環状・頭部外面ナデ	覆土中	20%
6	弥生土器	高杯	-	(4.9)	-	石英-長石-赤色粒子	橙	普通	頭部外面ナデ	下層	20%
7	弥生土器	高杯	-	(5.1)	-	石英-長石-赤色粒子	にぶい黄褐	普通	脚部内面ヘラナデ	下層	20%
8	弥生土器	広口壺	-	(41.2)	15.2	石英-雲母	にぶい橙	普通	側面・付加査二種による羽状織文 底部・砂目模	下層	60% PL.5
9	弥生土器	広口壺	16.0	33.9	9.1	石英-長石-雲母	にぶい黄褐	普通	I1(頭部)、頭部に羽状紋と不明 I1(頭部)、無文 頭部上位に指加査(4本)による縦区画(4本)による横区画(4本) 頭部内面ヘラナデ	下層	80% PL.4 焼付着
10	弥生土器	広口壺	[16.4]	30.4	7.8	石英-長石-雲母	にぶい橙	普通	I1(頭部)、上面に指状工具による押圧(1本) 頭部上位に指加査(5本)による山文 頭部上位に指加査(3本)による横区画(3本) 頭部内面ヘラナデ	床面	90% PL.4
11	弥生土器	広口壺	-	(29.6)	7.8	石英-長石-雲母-赤色粒子	にぶい黄褐	普通	頭部上位に指加査(3本)による横区画(3本) 頭部上位に指加査(5本)による山文 頭部上位に指加査(3本)による横区画(3本) 頭部内面ヘラナデ	床面	90% PL.4
12	弥生土器	広口壺	-	(18.0)	6.6	石英-長石-雲母	にぶい黄褐	普通	I1(頭部)、頭部に羽状紋と不明 頭部下位に付加査二種による羽状織文 底部・砂目模	下層	80% PL.4
14	弥生土器	広口壺	-	(14.8)	-	石英-長石-雲母	にぶい黄褐	普通	頭部上位に指加査(3本)による横区画(3本) 頭部上位に指加査(5本)による山文 頭部上位に指加査(3本)による横区画(3本) 頭部内面ヘラナデ	下層	30%
15	弥生土器	広口壺	-	(13.8)	9.0	石英-長石	橙	普通	側面・付加査二種による羽状織文	下層	20%
16	弥生土器	広口壺	[17.9]	(14.5)	-	石英-長石-雲母	にぶい黄褐	普通	I1(頭部)、頭部上位に指加査(4本)による横区画(4本) 頭部内面ヘラナデ	中層	10% PL.4
17	弥生土器	広口壺	[15.4]	(9.0)	-	石英-雲母-赤色粒子	浅黃褐	普通	I1(頭部)、頭部上位に指加査(3本)による横区画(3本) 頭部内面ヘラナデ	中層	20%
19	弥生土器	ミニチュア土器	6.7	3.3	3.8	石英-長石-雲母	にぶい橙	普通	側面外面ヘラナデ	下層	98% PL.5

番号	種 別	器 種	胎 土	色 調	焼成	文 様・手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
TP8	弥生土器	広口壺	石英-長石	にぶい橙	普通	河内泥口縫(1本)、頭部上位に付加査(2本)・押圧(1本)、頭部・側面を施文	中層	PL.6
TP9	弥生土器	広口壺	石英-雲母	にぶい褐	普通	I1(頭部)、上面に付加査を回転式押圧(1本)、頭部上位に指加査(3本)による横区画(3本) 頭部内面に光沢釉文	上中層	
TP14	弥生土器	広口壺	長石-雲母	にぶい褐	普通	頭部・側面状工具(3本)による縦区画(3本) 頭部上位に指加査(3本)による横区画(3本) 頭部内面に光沢釉文	下層	
TP16	弥生土器	広口壺	石英-長石	にぶい赤褐	普通	I1(頭部)、頭部上位に指加査(3本)による横区画(3本) 頭部内面に光沢釉文	覆土中	PL.6

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	特 徴	出土位置	備 考
DPI	土製勾玉	3.2	2.2	1.0	6.9	石英-長石-赤色粒子	外面ナデ	中層	100% PL.6

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	特 徴	出土位置	備 考
DP2	劫錐車	(5.7)	0.7	1.8	(52.1)	石英-長石-赤色粒子	漕車形、放射状にヘラ状工具による施文	床面	80% PL.6
DP3	劫錐車	5.9	0.6	3.4	(92.3)	石英-長石-雲母	逆台形状、丁寧なナデ、一方向からの穿孔	床面	90% PL.6
DP4	劫錐車	5.1	0.6	2.6	66.5	石英-長石-雲母-赤色粒子	ナデ、両面、中心より同心円形にストロー状工具による刺突文、側面にも同工具による二列の刺突文	覆土中	100% PL.6
DP5	劫錐車	5.2	0.7	2.0	(70.1)	石英-長石-雲母	ナデ	覆土中	95% PL.6

第3号住居跡（第11～13図）

位置 調査区の東部C 3a0区で、標高46mほどの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第4号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸5.25m、短軸4.58mの隅丸長方形で、主軸方向はN-9°-Eである。壁高は10~35cmで、直立している。

**床** ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁際から炭化材が、中央部付近からは焼土塊が出土している。

**炉** 中央部からやや北寄りに位置している。長径70cm、短径53cmの楕円形で、床面をわずかに皿状に掘り込んだ地床炉である。棒状の炉石が南側にわずかに掘り込まれた状態で出土している。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

#### 炉土層解説

1 基 地 色 槽土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量

**ピット** 12か所。P1~P4は深さ42~56cmで、形状と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ17cmで、炉と対面する南壁寄りに位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6~P12は深さ10~22cmで、性格は不明である。

**覆土** 8層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒 色 ローム粒子・焼土粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

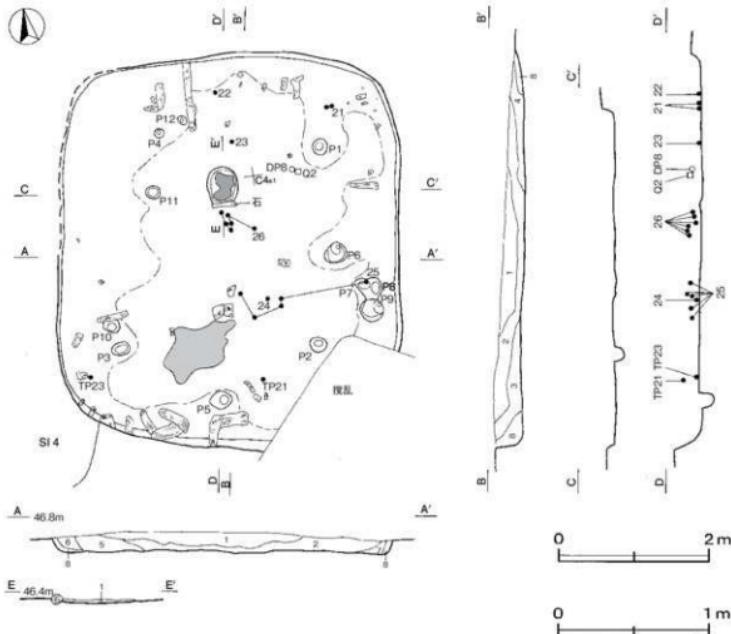
4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量

5 楊褐色

6 黑 色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

7 楊褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量

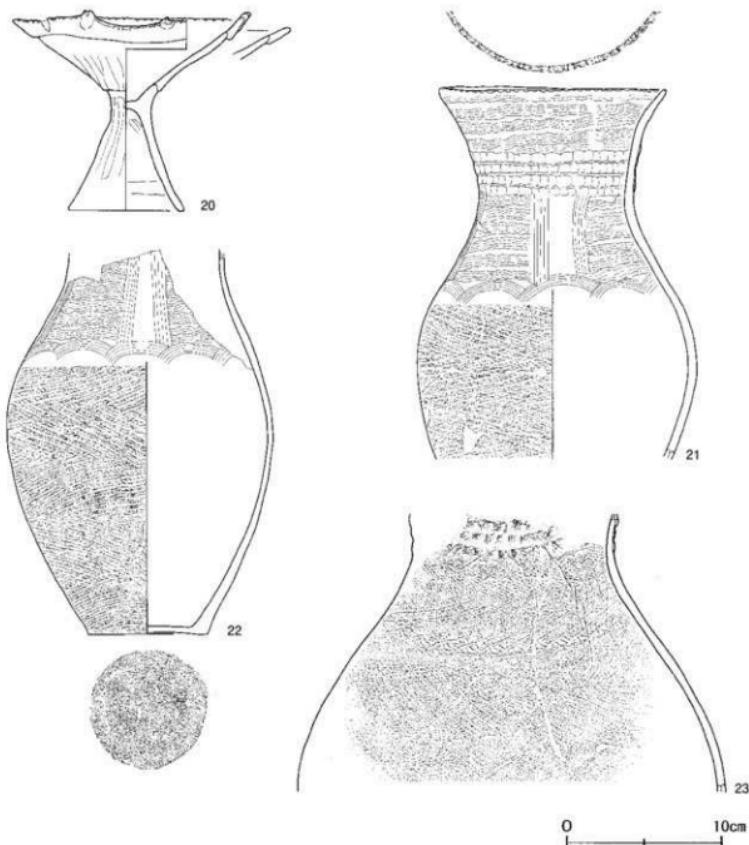
8 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量



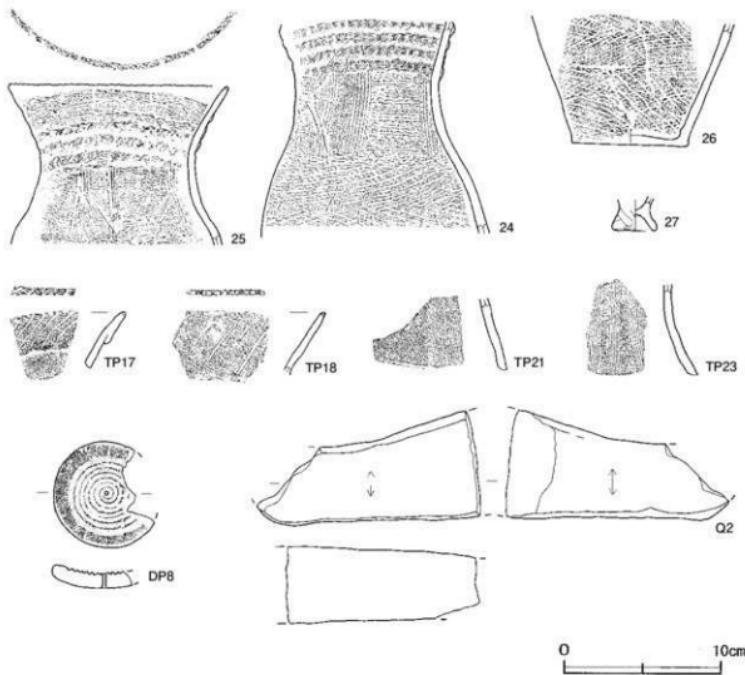
第11図 第3号住居跡実測図

**遺物出土状況** 弥生土器片238点（高坏2、広口壺235、ミニチュア土器1）、土製品1点（垂飾カ）、石器1点（砥石）、炉石1点が出土している。また、多量の炭化材が壁際から放射状に出土し、焼土塊も中央部の広い範囲から出土している。遺物は住居跡全体から覆土中層を中心として出土しており、住居の焼失に伴い遭棄されたものと考えられる。21は北東コーナー部の床面から横位で、22は中央北部壁際の床面から立位で、24は中央部の床面から横位で、23は炉北側の床面からそれぞれ出土している。25は覆土中層から散らばった状態で出土している。26は覆土下層と覆土中層から出土した破片が接合したものである。20・27は覆土中、DP8は覆土中層から逆位で出土している。

**所見** 時期は、出土土器から後期後半（十王台式期）と考えられる。放射状に出土した多量の炭化材は、丸材で屋根の垂木と考えられる。床面上の焼土塊及び炭化材の出土状況から、焼失住居跡と考えられる。



第12図 第3号住居跡出土遺物実測図(1)



第13図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

第3号住居跡出土遺物観察表(第12・13図)

番号	種 別	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼	文 様 と 手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
20	弥生土器	高環	15.3	12.9	7.5	石英・長石・雲母	に古い黄柾	普通	(1)腹上面にへら状工具による刷毛・环部 片(1本)有し、腹面に小突起1ヶ所、内面ナダ、 外側ヘラツア先端部は粘土を附加し、長 脚部、外側ヘラツア部分内面ナダ、輪郭直 角。	覆土中	90% PL.5
21	弥生土器	広口壺	14.8	(21.0)	-	石英・長石・雲母	に古い黄柾	普通	口沿上面に付加網は回転押圧、口辺部 は直角直脚部、内面は刷毛・环部(1本)有 り、内面ナダの1本の横帯、輪廓状工具によ る輪区画(4分割)内に光沢波状文、頸部 下位に同工具による下向波浪文、腹底付 加網二種による羽状織文。	床面	60% PL.5
22	弥生土器	広口壺	-	(25.0)	7.6	石英・長石・雲母	に古い黄柾	普通	頭部輪廓状工具(5分割)による輪区画内に光 沢波状文、頭部下位に同工具による下向波 浪文、腹底付加網二種による羽状織文。	床面	70% PL.5
23	弥生土器	広口壺	-	(18.0)	-	長石・雲母・赤色粒子	に古い黄柾	普通	頭部下位に軽い押圧のある3本の横帯 付加網による羽状織文。	床面	20% PL.5
24	弥生土器	広口壺	-	(13.5)	-	石英・長石・雲母	浅黄柾	普通	頭部上位に軽い押圧のある4本の横帯、輪 区画(3本)による輪区画(5分割)内に光 沢波状文、頭部下位に同工具による下向波 浪文、腹底付加網二種による羽状織文。	床面	40%
25	弥生土器	広口壺	[14.0]	(10.2)	-	石英・長石・赤色粒子	に古い黄柾	普通	口沿上面に付加網は回転押圧、口辺部輪 廓状工具による波状文、頭部下位に軽い押 圧のある3本の横帯、輪区画(5分割)内に光 沢波状文、頭部下位に同工具による下向波 浪文、頭部下位同工具による下向波浪文。	中層	30%
26	弥生土器	広口壺	-	(8.0)	7.4	石英・長石・雲母	に古い赤柾	普通	頭部、付加網二種による羽状織文 頭部、砂目板	中・下層	20%
27	弥生土器	土器	1/2チャフ	-	(2.2)	2.5	石英・長石	普通	頭部外側ナダ	覆土中	40%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP17	弥生土器	広口壺	長石	褐色	普通	割り返しL1縁、L1背部、上面に付加窓を回転押正 L1背部、同窓を施文	覆土中	
TP18	弥生土器	広口壺	青母	に赤い模	普通	L1背部、上面に付状工具による押圧 L1背部、輪歯状工具 (2本)による格子目文施文	中層	
TP21	弥生土器	広口壺	長石・青母	に赤い模	普通	頭部、輪歯状工具(4本)による縦区間に充填斜格子目文	中層	PL 6
TP23	弥生土器	広口壺	長石・青母	に赤い模	普通	頭部、輪歯状工具(6本)による縦区間	下層	PL 6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP8	重ねカ	68	15	02	(25.3)	不明	表面は、中心から裏巻き状に7本の溝を刻んでいる。 裏面は、1字に削削されている。	中層	60% PL 6

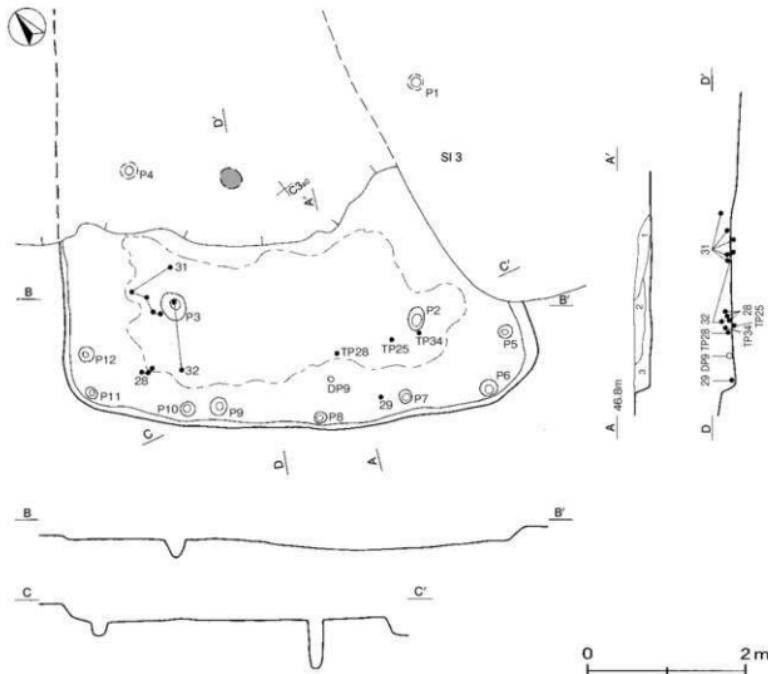
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	鉄石	(7.1)	(143)	50	(598.0)	砂岩	裏面2面	中層	PL 6

#### 第4号住居跡 (第14~16図)

位置 調査区の東部C 3 a9区で、標高46mほどの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第3号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北部が削平されており、確認できた長軸は597mで、短軸2.32mの隅丸方形又は隅丸長方形と推測され、主軸方向はN -36° - Eである。壁高は5~18cmで、外傾して立ち上がっている。



第14図 第4号住居跡実測図

**床** ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

**炉** 中央部からやや北寄りに位置している。耕作により削平されているため、地床炉の火床面のみ確認され、長径28cm、短径26cmの円形で、赤変硬化している。

**ピット** 12か所。P1～P4は深さ21～67cmで、形状と配置から主柱穴と考えられる。P5～P12は深さ12～27cmで、壁にそって巡っていることから壁柱穴と考えられる。

**覆土** 3層からなる。削平されているため部分的な確認ではあるが、壁際からレンズ状に堆積している状況から、自然堆積と考えられる。

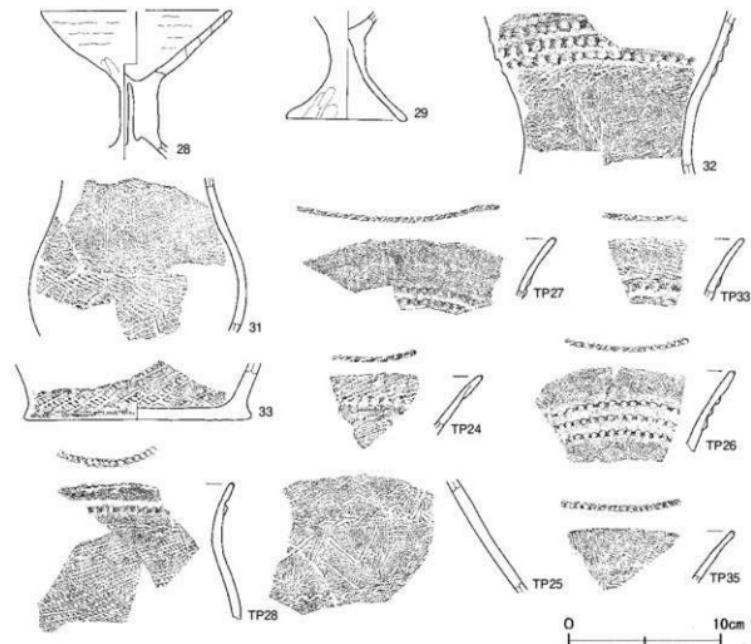
#### 土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量

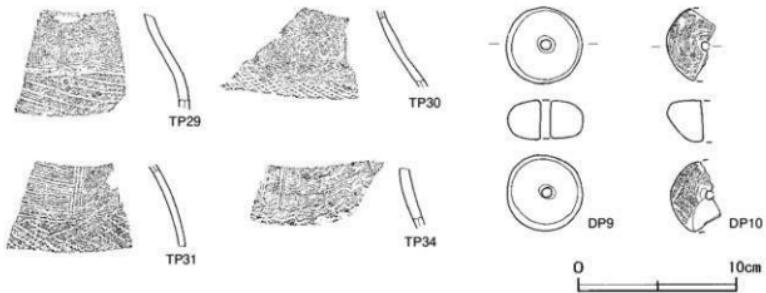
3	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
---	-----	----------------

**遺物出土状況** 弥生土器片380点（高環4、広口壺376）、土製品2点（紡錘車）が出土している。遺物は、南と西のコーナー部の覆土中層から集中して出土している。28・31・32は西のコーナー付近の覆土下層、TP25は南のコーナー部の床面から、29、TP28、DP9は覆土下層からそれぞれ出土している。また、流れ込みと考えられる繩文土器片2点も出土している。

**所見** 時期は、出土土器から後期後半（十王台式期）と考えられ、重複関係から、第3号住居よりや古い時期である。TP25は、櫛描文とともにS字の結節状文とヘラ状工具による連続山形文、区画内に付加条の繩で施文してある土器片である。他の地域の土器を真似て作られた可能性が考えられる。



第15図 第4号住居跡出土遺物実測図(1)



第16図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

第4号住居跡出土遺物観察表 (第15・16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
28	弥生土器	高環	(126)	(97)	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	杯盤内・外面、輪積状・杯盤内・外面ナデ	下層	40% PL.5
29	弥生土器	高環	-	(72)	8.0	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	輪積内面ナデ 外面ナリ	下層	20%
31	弥生土器	広口壺	-	(10.2)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	輪積内面ナデ 内面ナリ	下層	20%
32	弥生土器	広口壺	-	(10.7)	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	輪盤上位に軽い押圧による3本の縦帯、輪盤上位に同工具による波状文、腹部に斜めS字状文を施す。輪盤状工具(5本)による輪区画内に光沢波状文	下層	10%
33	弥生土器	広口壺	-	(3.7)	15.0	石英・長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	輪盤上位に軽い押圧による3本の縦帯、輪盤上位に斜めS字状文を施す。輪盤状工具(6本)による輪区画内に光沢波状文	覆土中	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP21	弥生土器	高環	長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	輪盤上位に軽い押圧による3本の縦帯、輪盤上位に斜めS字状文を施す。	覆土中	
TP25	弥生土器	広口壺	石英・長石	にぶい黄褐色	普通	輪盤上位に軽い押圧による3本の縦帯、輪盤上位に斜めS字状文を施す。	床面	PL.6 南面東系
TP26	弥生土器	広口壺	石英・長石	にぶい黄褐色	普通	輪盤上位に軽い押圧による3本の縦帯、輪盤上位に斜めS字状文を施す。	覆土中	
TP27	弥生土器	広口壺	長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	輪盤上位に軽い押圧による3本の縦帯、輪盤上位に斜めS字状文を施す。	覆土中	
TP28	弥生土器	広口壺	石英・長石	にぶい黄褐色	普通	輪盤上位に軽い押圧による3本の縦帯、輪盤上位に斜めS字状文を施す。	下層	保付着
TP29	弥生土器	広口壺	石英・長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	輪盤上位に軽い押圧による3本の縦帯、輪盤上位に斜めS字状文を施す。	覆土中	
TP30	弥生土器	広口壺	長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	輪盤上位に軽い押圧による3本の縦帯、輪盤上位に斜めS字状文を施す。	覆土中	PL.6
TP31	弥生土器	広口壺	石英・長石	にぶい黄褐色	普通	輪盤上位に軽い押圧による3本の縦帯、輪盤上位に斜めS字状文を施す。	覆土中	
TP33	弥生土器	広口壺	長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	輪盤上位に軽い押圧による3本の縦帯、輪盤上位に斜めS字状文を施す。	覆土中	
TP34	弥生土器	広口壺	石英・長石・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	輪盤上位に軽い押圧による3本の縦帯、輪盤上位に斜めS字状文を施す。	中層	
TP35	弥生土器	広口壺	長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	輪盤上位に軽い押圧による3本の縦帯、輪盤上位に斜めS字状文を施す。	覆土中	

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP19	輪錐車	4.7	0.7	2.5	366	石英・長石	丁寧なナデ	下層	PL.6
DP10	輪錐車	4.5	0.6	2.7	(25.5)	石英・長石・雲母	表面、輪錐状工具による凹文 側面、同工具による施文	覆土中	

第5号住居跡 (第17・18図)

位置 調査区の中央部B 317区で、標高46mほどの台地の平坦部に位置している。

**重複関係** 第2号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 北東部は削平され、南部は調査区域外である。確認できた長軸は4.61mで、短軸は2.45mの隅丸方形又は隅丸長方形と推測され、主軸方向はN-40°-Eである。壁高は6~28cmで、外傾して立ち上がっていいる。

**床** ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

**炉** 中央部からやや南西壁寄りに位置している。長径28cm、短径26cmの円形で、床面をわずかに皿状に掘り込んだ地床炉である。板状の灰石が南側にわずかに掘り込まれた状態で出土している。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

#### 炉土層解説

1 黒褐色 桧土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

**ピット** 8か所。P1・P2は深さ40~59cmで、形状と配置から主柱穴と考えられる。P3~P8は深さ24~59cmで、位置的に補助柱穴と考えられる。

**覆土** 5層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

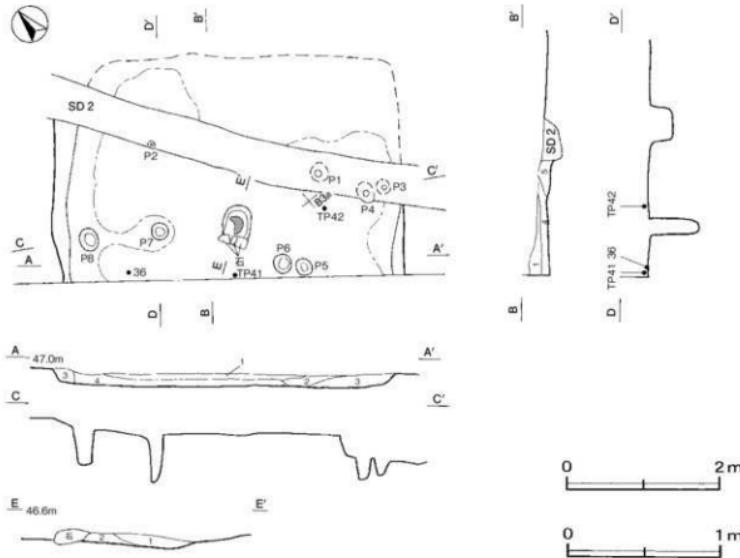
#### 土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量	4 黒褐色 ロームブロック少量、燒土粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量	5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量	

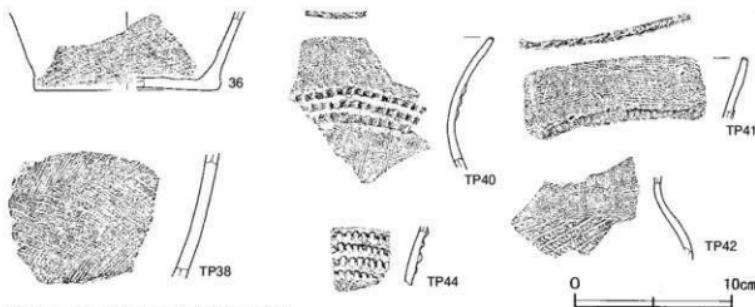
**遺物出土状況** 弥生土器片127点(広口壺)、炉石1点が、炉の周辺から集中して出土している。36は炉西部の下層から逆位で出土している。TP41は炉南西部、TP42は炉東部のいずれも覆土下層から出土している。

TP38・TP40・TP44は覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から後期後半(十王台式期)と考えられる。



第17図 第5号住居跡実測図



第18図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表（第18図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
36	弥生土器	広口壺	—	(5.0)	11.6	石英・長石 普通	陶器付加条二種繩文施文 底部砂目板	下層 10%
TP38	弥生土器	広口壺	石英・長石・雲母	にせい	普通	網目状文	覆土中	
TP40	弥生土器	広口壺	石英・長石	にせい	普通	網目状文 網目状工具による網目状文	覆土中	
TP41	弥生土器	広口壺	長石・雲母	にせい	普通	網目状文 網目状工具による網目状文	下層	
TP42	弥生土器	広口壺	長石・雲母	にせい	普通	網目状文 網目状工具による網目状文	下層	
TP44	弥生土器	広口壺	長石	にせい	普通	網目状文 網目状工具による網目状文	覆土中	

第6号住居跡（第19図）

位置 調査区の中央部B 3h6区で、標高46mほどの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北西コーナー部は電線工事のため削平されており、推定で長軸4.38m、短軸4.36mの隅丸方形と考えられ、主軸方向はN-36°-Eである。壁高は最大19cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部からやや北東寄りに位置している。削平されているため、地床炉の火床面のみ確認されており、長径30cm、短径22cmの楕円形で、火熱を受け赤変化している。

ピット 10か所。P 1～P 4は深さ39～67cmで、形状と配置から主柱穴と考えられる。P 5・P 6は深さ54・62cmで、炉と対面する南壁寄りに位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 7～P 10は深さ20～27cmで、性格は不明である。

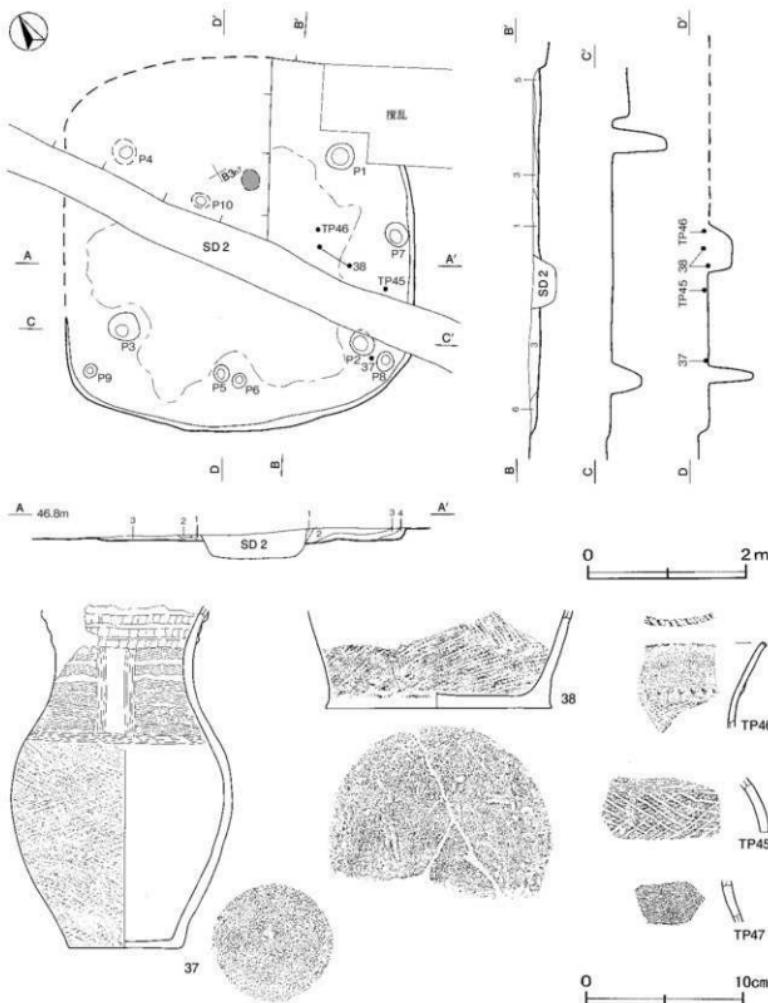
覆土 6層からなり、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒	色	ローム粒子少量、燒土粒子・白色粒子微量	4 黑	褐	色	ロームブロック・赤色粒子微量
2 黒	色	燒土粒子・白色粒子微量	5 黑	褐	色	ローム粒子少量、燒土粒子微量
3 黑	褐	色	6 黑	褐	色	ローム粒子少量、白色粒子微量

**遺物出土状況** 弥生土器片83点（広口壺）が、炉を中心として南東部から多く出土している。37、TP45は南壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。38は中央部東よりの覆土下層から出土した破片が接合したもの、TP46は同じく覆土下層から出土したものである。

**所見** 時期は、出土土器から後期後半（十王台式期）と考えられる。



第19図 第6号住居跡・出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表（第19図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
37	弥生土器	広口壺	-	(21.8)	7.0	石英・長石・雲母	灰黄褐色	普通	頭部上位に軽い押圧のある3本の隆起、頭部上位に白木はねによる横走文、頭部上位に三月による横走文	下層	9.9% PL.5 外面焼付着
38	弥生土器	広口壺	-	(6.2)	14.3	石英・長石・雲母・赤色粒子	に赤い斑	普通	頭部・付加条二種横文施文、底部・縫目痕	中・下層	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP45	弥生土器	広口壺	長石・雲母	に赤い斑	普通	頭部下位に輪廻状工具(5本)による横走文、頭部・付加条二種横文施文	下層	
TP46	弥生土器	広口壺	長石・雲母	に赤い斑	普通	口判部・上面に付加画を回転押圧、口沿部・無文、頭部上位に軽い押圧のある3本の隆起、頭部・付加条二種横文施文	下層	
TP47	弥生土器	広口壺	長石・雲母	に赤い斑	普通	頭部・輪廻状工具(6本)による輪廻区内に充填横走文及び斜格子横文	覆土中	

第7号住居跡（第20・21図）

位置 調査区の中央部B 3d1区で、標高46mほどの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 南西部は調査区域外である。また、削平や擾乱を受けて規模と形状は不明である。

床 平坦で、炉の東部が締まっている。

炉 火床面のみ確認されおり、長径30cm、短径22cmの梢円形で、火熱を受け赤変硬化している。

ピット 2か所。P1は深さ47cmで、形状と配置から主柱穴と考えられる。P2は深さ10cmで、性格は不明である。

覆土 3層からなる。層厚が薄く擾乱を受けているため、堆積状況は不明である。

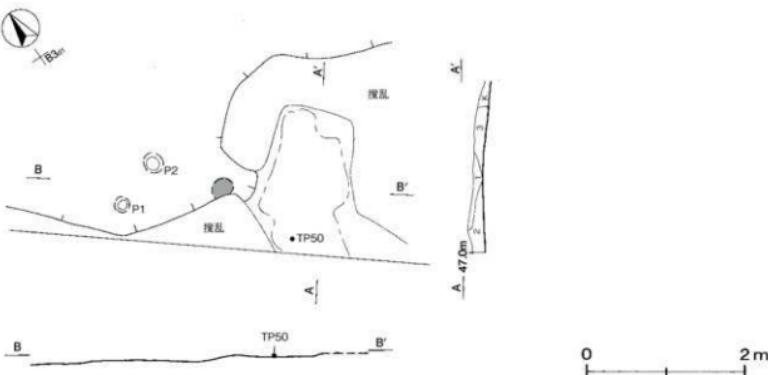
#### 土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量  
2 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量

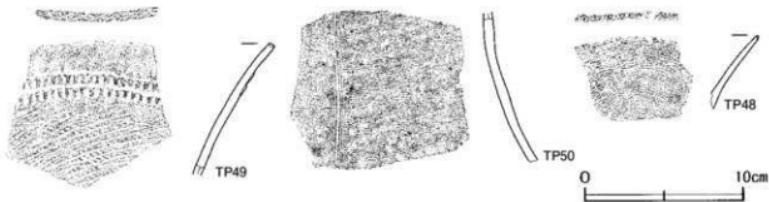
3 黑褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片38点（広口壺）が出土している。土器の多くは床面及び覆土下層から出土しているが、ほとんどは細片である。TP50は炉南東部の覆土下層、TP48・TP49は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半（十王台式期）と考えられる。



第20図 第7号住居跡実測図



第21図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP48	弥生土器	高环	長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	口円部、上面に付加輪を回転押付。口沿部、側面状工具による流波状文。	覆土中	
TP49	弥生土器	広口壺	石英・長石・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	口円部、上面に付加輪を回転押付。口沿部、無文。頭部上位に軽い押圧のある2本の條筋。側面、付加輪・側面文様文。	覆土中	
TP50	弥生土器	広口壺	石英・長石	にぶい黄褐色	普通	側面状工具(5本)による縦区画内に充填波状文	下層	

表2 弥生時代住居跡一覧表

番号	位 置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面 壁溝 柱穴(插入式)・窓穴 設置	内 部 施 設		覆土	主な出土遺物	時 期	備考 新旧関係 (H1→H2)
							壁溝	窓穴				
1	C 4d8	N-48°-E	隅丸方形	4.47 × 4.10	24~36	平坦	-	4	1	1	自然	H1:灰石塗 H2:灰石塗
2	C 4b6	N-12°-E	隅丸方形	4.69 × 4.65	10~28	平坦一部	3	1	5	-	自然	高塗:灰石塗 中塗:土塗 低塗:草石塗
3	C 3d0	N- 9°-E	隅丸長方形	5.25 × 4.58	10~35	平坦	-	4	1	7	-	自然 高塗:灰石塗 中塗:土塗 低塗:草石塗
4	C 3d0	N-36°-E	〔隅丸方形又は 隅丸長方形〕	5.97 × (2.32)	5~18	平坦	-	4	-	8	-	自然 高塗:灰石塗
5	B 3d7	N-40°-E	〔隅丸方形又は 隅丸長方形〕	[4.61] × (2.45)	6~28	平坦	-	2	-	6	-	自然 灰石塗
6	B 3b6	N-36°-E	〔隅丸方形〕	[4.38] × 4.26	-19	平坦	-	4	2	4	-	自然 灰石塗
7	B 3d1	-	不明	-	-	平坦	-	1	-	1	不明	灰石塗

## (2) 土坑

### 第1号土坑（第22図）

位置 調査区南部のB 4ii区で、標高46mほどの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.58m、短径1.90mの楕円形で、長径方向はN-86°-Eである。深さは92cmで、壁は垂直に立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、底面の北東部に、奥行き50cm、高さ20cmの高まりが確認された。

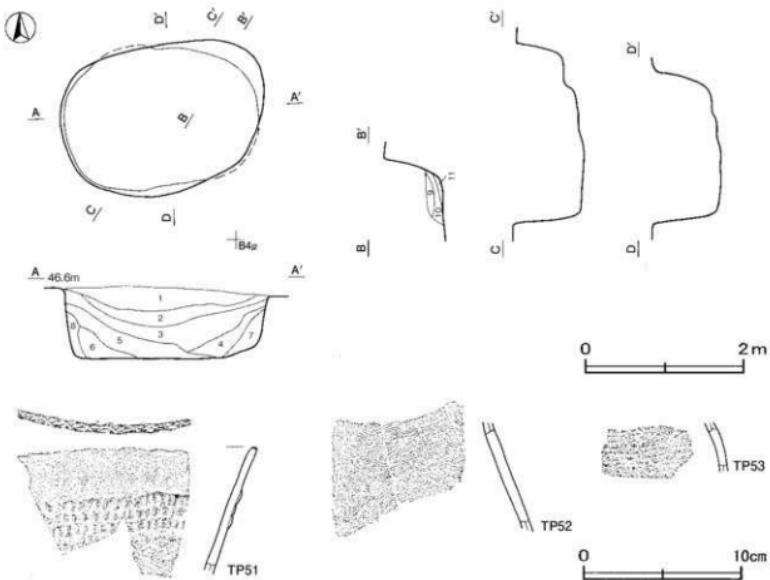
覆土 11層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	黒	白色粒子少量、ローム粒子・赤色粒子微量	6	黒	色	ロームブロック・白色粒子微量
2	黒	白色粒子少量、ローム粒子・燒土粒子・赤色粒子微量	7	黒	色	ローム粒子・白色粒子微量
3	黒	白色粒子少量、ロームブロック・燒土ブロック・赤色ブロック微量	8	黒	色	ローム粒子・燒土粒子・白色粒子微量
4	黒	ロームブロック・燒土粒子・白色粒子微量	9	黒	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
5	黒	ロームブロック・燒土粒子・白色粒子微量	10	黒	褐色	ロームブロック少量
		白色粒子微量	11	黒	褐色	ロームブロック少量

**遺物出土状況** 弥生土器片70点（広口壺）が出土している。TP51～TP53は覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から後期後半（十王台式期）と考えられる。高まりは、上面が踏み固められており出入り口のための施設と考えられ、貯蔵穴の性格を持っていたと推定される。



第22図 第1号土坑・出土遺物実測図

第1号土坑出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	地土	色調	焼成	文様・手法の特徴		出土位置	備考
						1) 異なる、上面に付加層を有する円形	2) 頂部に軽い押圧のある3本の隆筋		
TP51	弥生土器	広口壺	石英・長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	1) 異なる、上面に付加層を有する円形	2) 頂部に軽い押圧のある3本の隆筋	頂部、側面	覆土中
TP52	弥生土器	広口壺	石英・長石・雲母・赤色粒子	灰黃褐色	普通	頂部、側面	3本の隆筋による縦区画内に光沢波状文	頂部	覆土中
TP53	弥生土器	広口壺	石英・長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	頂部	側面	頂部、側面	覆土中

第2号土坑（第23図）

**位置** 調査区南部のC 4 b3区で、標高46mほどの台地の平坦部に位置している。

**規模と形状** 南西部は擾乱のため、長径2.44m、確認できた短径は1.46mの円形又は梢円形と推測され、長径方向はN-70°-Wである。深さは29cmで、壁は緩やかに立ち上がっている。底面は平坦で、北部は硬化している。

**覆土** 3層からなる。北東壁から流れ込んだレンズ状の堆積状況から、自然堆積と考えられる。

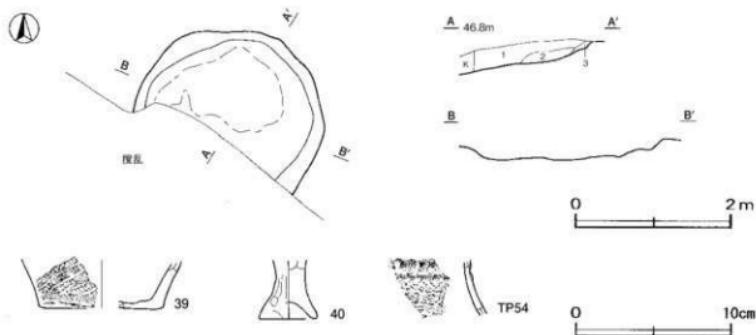
#### 土層解説

1 基層 色 ロームブロック少量、赤色粒子微量  
2 黒色 赤色ブロック・ローム粒子微量

3 黒色 ローム粒子・赤色粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片13点（高環1、広口壺12）が出土している。39・40、TP54は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半（十王台式期）と考えられる。



第23図 第2号土坑・出土遺物実測図

第2号土坑出土遺物観察表（第23図）

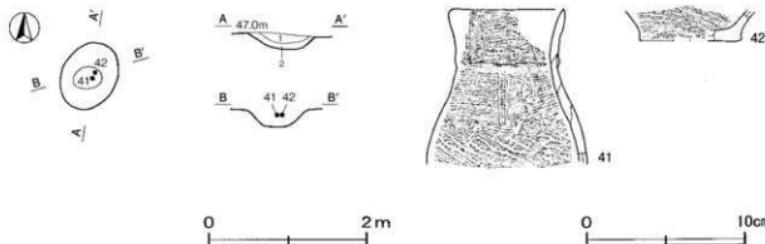
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
39	弥生土器	広口壺	-	(3.1)	[8.2]	石英・長石・雲母	暗灰黄	普通	網目織、付加条二重織文、弦部、縫目織	覆土中	5%
40	弥生土器	三つ穴土器	-	(3.8)	39	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	脚部外側ナギ	覆土中	30%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP54	弥生土器	広口壺	長石・雲母	にぶい褐	普通	頭部上位に軽い押圧のある2本の隆起、側面工具(3本)による縦区画内光埴波状文	覆土中	

第27号土坑（第24図）

位置 調査区南部のA 216区で、標高46mほどの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.89m、短径0.68mの梢円形で、長径方向はN-28°-Eである。深さは25cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は皿状である。



第24図 第27号土坑・出土遺物実測図

**覆土** 2層からなる。レンズ状の堆積状況から、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量

2 暗褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 弥生土器片5点（広口壺）が出土している。41・42は覆土上層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から後期後半（十王台式期）と考えられる。

第27号土坑出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
41	弥生土器	広口壺	[72]	(9.8)	-	石英・雲母	にぶい黄	普通	口部上面に付加輪を押す。口辺部、腹両 状工具(4本)による縦溝と内光煩模走文。 腹部には縦溝と内光煩模走文。口部に付 する縦溝と内光煩模走文。底部下部に付 する下向き波文。側部、付加輪二種類 文施文。胸部内面、輪模痕	上層	20%
42	弥生土器	広口壺	-	(2.0)	[6.6]	石英・長石・雲母	にぶい黄	普通	側部付加輪二種類文施文。底部日痕	上層	5%

表3 弥生時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規格		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	B41	N-36°-E	楕円形	2.58×1.90	92	垂直	平頭	自然	広口壺	後期後半 底部に高まり有り
2	C4b3	N-20°-W	(円筒又は 楕円形)	2.44×(1.46)	29	緩斜	平頭	自然	高環広口壺	後期後半
27	A26	N-28°-E	楕円形	0.89×0.68	25	外傾	圓状	自然	広口壺	後期後半

#### (3) 炉跡

第1号炉跡（第25図）

**位置** 調査区の中央部B 319区で、標高46mほどの台地の平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径0.43m、短径0.30mの楕円形で、深さは6cmである。長径方向はN-38°-Wで、炉床は皿状を呈し、火床部は火熱を受けて赤変硬化している。弥生土器の口縁部片を用いた土器甌い炉である。

**覆土** 3層からなる。ローム粒子を含み、不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量

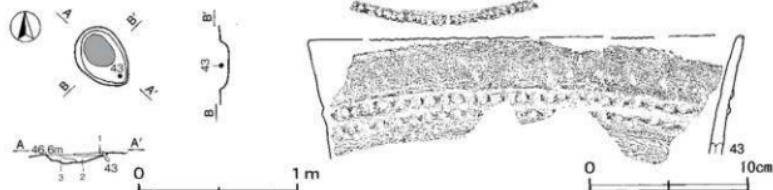
3 褐色 ローム粒子多量

2 暗褐色 ローム粒子中量

**遺物出土状況** 弥生土器片4点（広口壺）が出土している。43は、壁際から埋め込まれた状態で出土している。

土器片が出土しているが、細部のため同定できなかった。

**所見** 時期は、出土土器から後期後半（十王台式期）と考えられる。住居跡の炉を想定したが、床や柱穴等は確認されなかったため、屋外の炉跡と考えられる。



第25図 第1号炉跡・出土遺物実測図

### 第1号炉跡出土遺物観察表（第25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
43	鼎生土器	広口壺	[27.4]	(7.5)	-	石英・長石	に赤い黄褐色	普通	[頂部上面に付加焼成部] [辺縁無文] [辺縁下部に微細な凹凸] [辺縁下部に細かな凹凸]	中層	5%

### 3 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期が明確でない土坑24基、溝跡4条、柵跡2条、ピット群2か所を確認した。以下確認された遺構の特徴と出土遺物について記述する。

#### (1) 土坑

時期・性格が不明な土坑を、実測図（第26・27図）及び一覧表で掲載する。

##### 第3号土坑土層解説

- 1 赤褐色 赤色粒子多量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、赤色粒子・白色粒子微量
- 3 黄褐色 ロームブロック少量、赤色粒子・白色粒子微量

##### 第4号土坑土層解説

- 1 黄褐色 ロームブロック多量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、赤色粒子微量
- 3 黄褐色 ローム粒子中量
- 4 黄褐色 ローム粒子多量、赤色粒子微量

##### 第6号土坑土層解説

- 1 黄褐色 ロームブロック中量
- 2 黄褐色 ロームブロック多量

##### 第7号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 黑褐色 ロームブロック・燒土粒子・炭化粒子微量
- 4 黄褐色 ロームブロック中量

##### 第8号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 黄褐色 ロームブロック中量
- 4 黑褐色 ロームブロック中量
- 5 黑褐色 ロームブロック少量

##### 第9号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック少量、燒土粒子微量
- 2 黑褐色 ロームブロック少量
- 3 黑褐色 ロームブロック・燒土粒子微量
- 4 黑褐色 ロームブロック微量

##### 第10号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック少量、赤色ブロック微量
- 2 黑褐色 ロームブロック少量

##### 第11号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黑褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

##### 第12号土坑土層解説

- 1 暗褐色 炭化物・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

##### 第14号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック少量、燒土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

##### 第15号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、燒土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・燒土粒子少量
- 4 黄褐色 ロームブロック中量

##### 第16号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック少量

##### 第17号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック少量

##### 第18号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 2 黑褐色 ローム粒子微量

##### 第19号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック少量、燒土粒子微量
- 2 黑褐色 ロームブロック少量

##### 第20号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック中量、赤色粒子・白色粒子微量

##### 第21号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック中量

##### 第22号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック多量、赤色粒子微量
- 2 黑褐色 ロームブロック中量、赤色粒子微量

##### 第23号土坑土層解説

- 1 黑褐色 赤色粒子・白色粒子微量
- 2 暗褐色 赤色粒子・白色粒子微量
- 3 黄褐色 ローム粒子中量

##### 第24号土坑土層解説

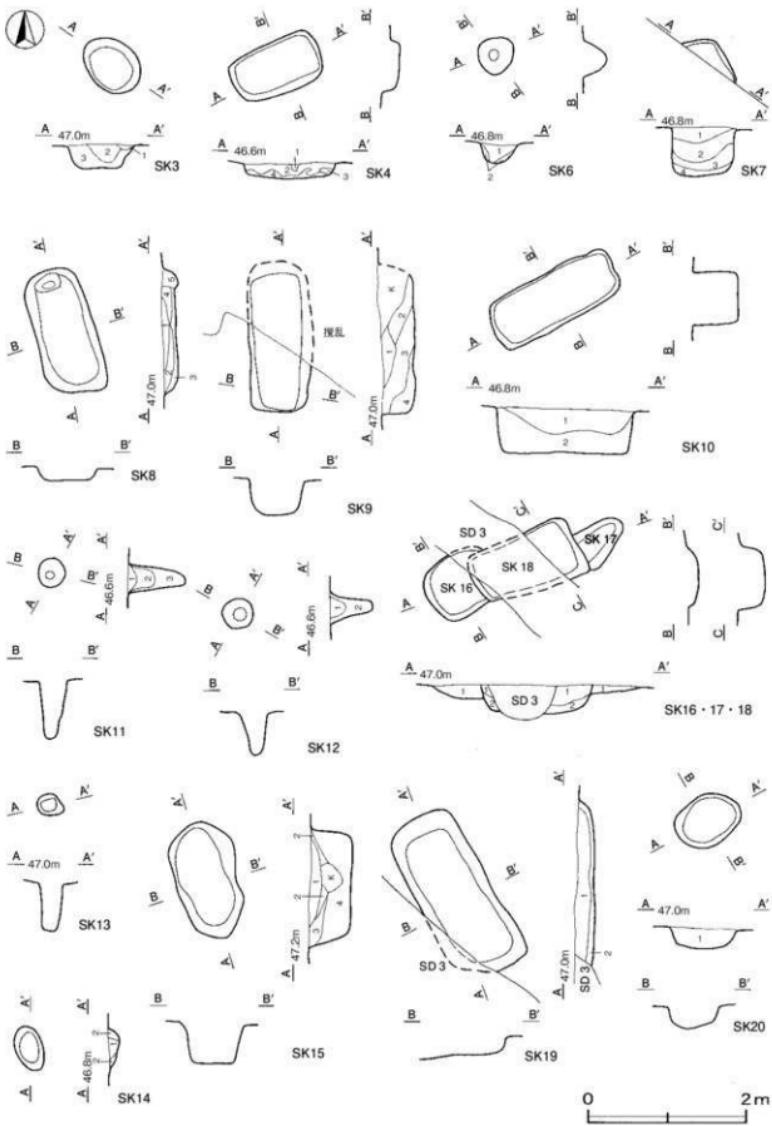
- 1 暗褐色 ロームブロック少量

##### 第26号土坑土層解説

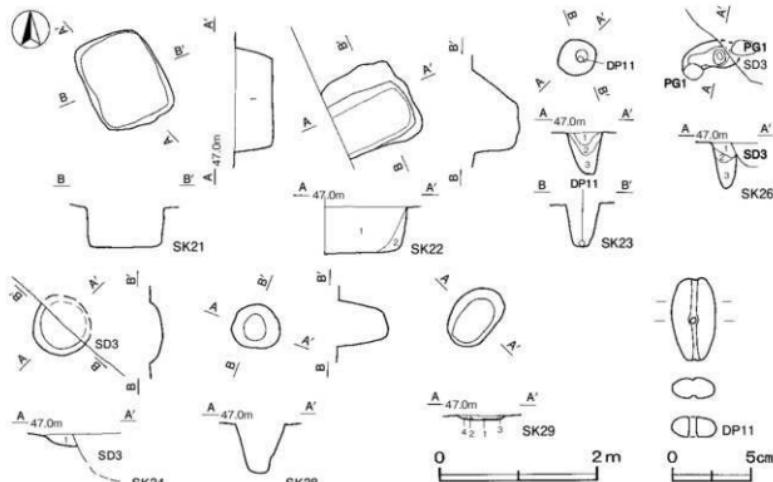
- 1 黑褐色 ローム粒子少量、燒土粒子微量
- 2 黑褐色 ローム粒子少量
- 3 黄褐色 ロームブロック少量

##### 第29号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、燒土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量
- 4 黄褐色 ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量



第26図 その他の土坑実測図



第27図 その他の土坑・出土遺物実測図

第23号土坑出土遺物観察表（第27図）

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP11	有孔土器	5.2	29	0.5	19.4	石英・長石	長軸方向に溝を這らし、中央部を穿孔。	底面	PL6

表4 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	形状	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係 (旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
3	A2e1	N-49°-W	楕円形	0.80 × 0.62	31	外傾	平坦	人為	—	
4	B3e0	N-61°-E	椭丸長方形	1.18 × 0.65	18	外傾	平坦	人為	弥生土器片	
6	B3g5	—	円形	0.67 × 0.45	24	外傾	盤状	人為	—	
7	R3e1	—	〔椭丸長方形〕	0.68 × 0.42	58	垂直	平坦	人為	—	
8	B3e2	N-18°-W	椭丸長方形	1.65 × 0.75	20	外傾	凹凸	人為	—	
9	B2e0	N-0°	椭丸長方形	1.90 × 0.83	45	垂直	平坦	自然	弥生土器片	
10	A2g	N-61°-E	椭丸長方形	1.72 × 0.67	58	垂直	平坦	人為	圓文土器片、弥生土器片	
11	B3g0	—	円形	0.38 × 0.36	72	外傾	平坦	自然	—	
12	B3g9	—	円形	0.41 × 0.39	54	外傾	平坦	自然	—	
13	B3e3	N-63°-W	楕円形	0.36 × 0.28	60	垂直	平坦	—	—	
14	A3j1	N-24°-W	楕円形	0.60 × 0.35	15	傾斜	凹凸	人為	—	
15	B2g6	N-19°-W	楕円形	1.50 × 0.80	54	外傾	平坦	人為	—	
16	A2h5	N-58°-E	〔楕円形〕	(0.61) × 0.79	15	傾斜	盤状	—	—	本跡→SK18→SD3
17	A2h6	N-55°-E	〔楕円形〕	(0.62) × 0.52	11	傾斜	平坦	—	—	本跡→SK18
18	A2h6	N-67°-E	椭丸長方形	(1.38) × (0.75)	38	外傾	平坦	自然	—	SK16-17→本跡→SD3

番号	位置	長径方向	形状	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
19	A2b6	N-30°-W	圓丸長方形	2.22 × 0.92	28	外傾	平坦	自然	縄文土器片、弥生土器片	本路→SD3
20	A2b6	N-60°-E	椭円形	0.83 × 0.63	25	外傾	圓状	自然	—	
21	A2g5	N-23°-W	圓丸長方形	1.26 × 0.98	49	垂直	平坦	自然	—	
22	A2h5	N-64°-E	[圓丸長方形]	(1.05) × 1.10	56	垂直	平坦	人為	—	
23	A2b6	—	円形	0.58 × 0.56	53	外傾	U字状	自然	土錐	
24	A2b6	—	円形	(0.78) × 0.74	16	縦斜	圓状	自然	—	本路→SD3
26	A2g5	N-80°-E	椭円形	(0.80) × 0.30	68	垂直	圓状	自然	—	本路→SD3, PG1
28	B2e7	—	円形	0.63 × 0.58	62	外傾	圓状	—	—	
29	A2b6	N-35°-E	椭円形	0.82 × 0.64	15	外傾	圓状	人為	—	

## (2) 溝跡

### 第1号溝跡 (第28図・付図)

位置 調査区中央部のB 3j8区～B 4g1区で、標高46mほどの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第2号溝跡を掘り込んでいる。

方向と規模と形状 調査区を二分するように南北方向(N-47°-E)に直線的に延びている。確認できた長さは15.7mで、上幅84～114cm、下幅20～58cmで、深さは44～54cmである。断面形はU字状を呈している。底面は平坦で、南から北の方向に緩やかに傾斜している。

覆土 4層からなる。レンズ状の堆積状況から、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒 色	ロームブロック少量、白色粒子微量	3 黒 色	ロームブロック少量、赤色粒子微量
2 黒 色	ローム粒子少量、白色粒子微量	4 黒 色	ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片161点(広口壺)、土製品1点(紡錘車)が出土している。これらの遺物は、ほとんどが覆土上層から出土しており、流れ込みと考えられる。

所見 時期は、伴う土器がないため不明である。また、性格も不明である。

### 第2号溝跡 (第28図・付図)

位置 調査区中央部のB 3e4区～B 3j8区で、標高46mほどの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第5・6号住居跡を掘り込み、第1号溝に掘り込まれている。

方向と規模と形状 北西部は搅乱のため確認できなかった。調査区を東西方向(N-39°-W)に継続するよう延びている。確認できた長さは26.0mで、上幅46～70cm、下幅22～52cmで、深さは28～42cmである。断面形はU字状を呈している。底面は平坦で、緩やかに西方向に傾斜しながら調査区域外へ延びている。

覆土 4層からなる。レンズ状の堆積状況から、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒 色	ロームブロック少量	3 黒 色	ロームブロック微量
2 黒 色	ローム粒子・焼土粒子・白色粒子微量	4 黒 色	ローム粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片94点(広口壺)が覆土上層から出土しており、流れ込みと考えられる。

所見 時期は、重複関係から、弥生時代後期後半以降と考えられるが、詳細は不明である。また、性格も不明である。

### 第3号溝跡（第28図・付図）

位置 調査区北西部のA 2e2区～A 2j8区で、標高46mほどの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第4号溝、第1・2号溝跡、第1号ビット群に掘り込まれている。

方向と規模と形状 北西部は調査区域外に及び、南東部は擾乱のため確認することができなかった。調査区を東西方向（N-51°-W）に縱断するように延びている。確認できた長さは345m、上幅61～100cm、下幅48～72cmで、深さは5～28cmである。底面は平坦で、断面形は逆台形状を呈している。

覆土 2層からなる。レンズ状の堆積状況から、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒 色 ロームブロック・赤色ブロック・白色粒子微量 2 黒 黄色 ロームブロック・赤色ブロック微量

遺物出土状況 繩文土器片7点、弥生土器片44点（広口壺）が覆土上層から出土しており、すべて流れ込みと考えられる。

所見 時期は、伴う土器がないため不明である。また、性格も不明である。

### 第4号溝跡（第28図・付図）

位置 調査区北西部のA 2f4区～A 2g4区で、標高46mほどの台地の平坦部に延びている。

重複関係 第3号溝跡を掘り込んでいる。

方向と規模と形状 北西部は、調査区域外のため、確認することはできなかった。調査区を東西方向（N-35°-W）に延びている。確認できた長さは4.60m、上幅32～44cm、下幅8～20cmで、深さは8～26cmである。

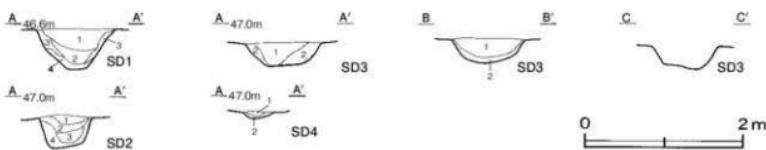
底面は皿状で、断面形はU字状を呈している。

覆土 2層からなる。レンズ状の堆積状況から、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒 色 ローム粒子・赤色粒子・白色粒子微量 2 黒 黄色 ロームブロック・赤色ブロック微量

所見 時期は、伴う土器がないため不明である。また、性格も不明である。



第28図 第1～4号溝跡実測図

表5 溝跡一覧表

番号	位置	走行方向	観 構				断面	底面	覆土	出土遺物	時期	備考 新旧関係(旧→新)
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
1	B3j8～B4g1	N-47°-E	(15.7)	84～114	20～58	44～54	U字状	平頭	自然	縄文土器片 砂疊車	不明	SD2→本跡
2	B3e4～B3j8	N-39°-W	(26.0)	96～70	22～52	28～42	U字状	平頭	自然	縄文土器片	弥生後期 後半以降	SI5-6→本跡→SD1
3	A2e2～A2j8	N-51°-W	(34.5)	61～100	48～72	5～28	逆台形状	平頭	自然	縄文土器片 弥生土器片	不明	本跡→SD4, SA1-2, PG1
4	A2f1～A2g4	N-35°-W	(4.60)	32～44	8～20	8～26	U字状	皿状	自然	—	不明	SD3→本跡

### (3) 横跡

#### 第1号横跡（第29図）

位置 調査区北部のA 2 e2区で、標高46mほどの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第3号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北西部は調査区域外に延び、確認できなかった。南北方向（N - 50° - W）に、ピット3か所が直線的に並んでいる。ピットは径18~34cmの円形で、深さは30~58cmである。ピット間寸法はP1・P2間が0.45m、P2・P3間が0.95mである。

所見 時期は、出土土器がないため不明である。

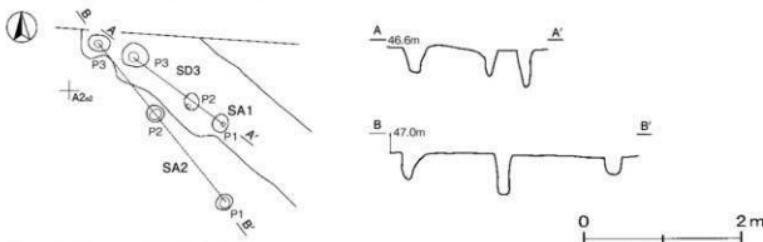
#### 第2号横跡（第29図）

位置 調査区北部のA 2 e2区で、標高46mほどの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第3号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北西部は調査区域外に延び、確認できなかった。南北方向（N - 40° - W）に、ピット3か所が直線的に並んでいる。ピットは径23~29cmの円形で、深さは21~53cmである。ピット間寸法はP1・P2間が1.4m、P2・P3間が1.2mである。

所見 時期は、出土土器がないため不明である。



第29図 第1・2号横跡実測図

表6 横跡一覧表

番号	位置	走方向	柱穴本数	長さ(m)	柱間(m)	柱穴平面形	深さ(cm)	出土遺物	時期	備考 新旧関係(旧→新)
1	A2e2	N-50°-W	3	1.4	0.45, 0.95	円形	30~58	—	不明	SD3→本跡
2	A2e2	N-40°-W	3	2.6	1.2, 1.4	円形	21~53	—	不明	SD3→本跡

### (4) ピット群

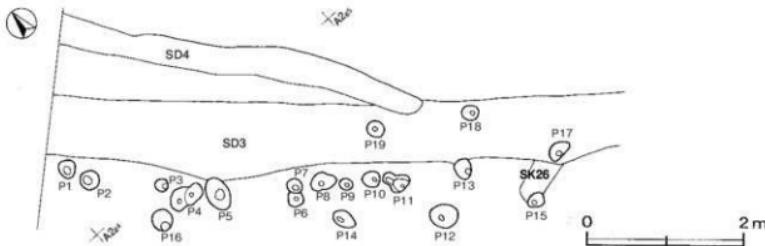
#### 第1号ピット群（第30図）

位置 調査区北部のA 2 g1区で、標高46mほどの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第26号土坑、第3号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東西5m、南北6mの範囲から、19か所のピットを確認した。ピットは径15~44cmの円形又は梢円形で、深さは16~58cmである。

所見 ピットの配置及び柱間寸法に規則性が見られず、ピット群として取り扱った。時期は、出土土器がないため不明である。



第30図 第1号ピット群実測図

表7 第1号ピット群計測表

ピット番号	長径(cm) × 短径(cm)	深さ(cm)
1	21×20	20
2	26×24	35
3	17×15	16
4	42×15	16
5	44×36	44
6	(19)×19	28
7	19×17	25

ピット番号	長径(cm) × 短径(cm)	深さ(cm)
8	34×21	51
9	15×15	22
10	22×20	26
11	34×21	41
12	35×21	26
13	24×22	54
14	33×18	33

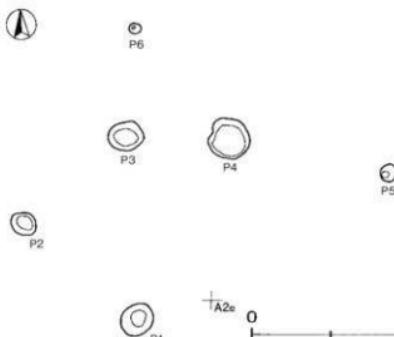
ピット番号	長径(cm) × 短径(cm)	深さ(cm)
15	25×17	21
16	29×26	34
17	30×18	21
18	21×17	47
19	21×21	58

第2号ピット群 (第31図)

位置 調査区北部のA 2e1区で、標高46mほどの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 東西8m、南北5mの範囲から、6か所のピットを確認した。ピットは径16~46cmの円形又は梢円形で、深さは10~54cmである。

所見 ピットの配置及び柱間寸法に規則性が見られず、ピット群として取り扱った。時期は、出土土器がないため不明である。



第31図 第2号ピット群実測図

表8 第2号ピット群計測表

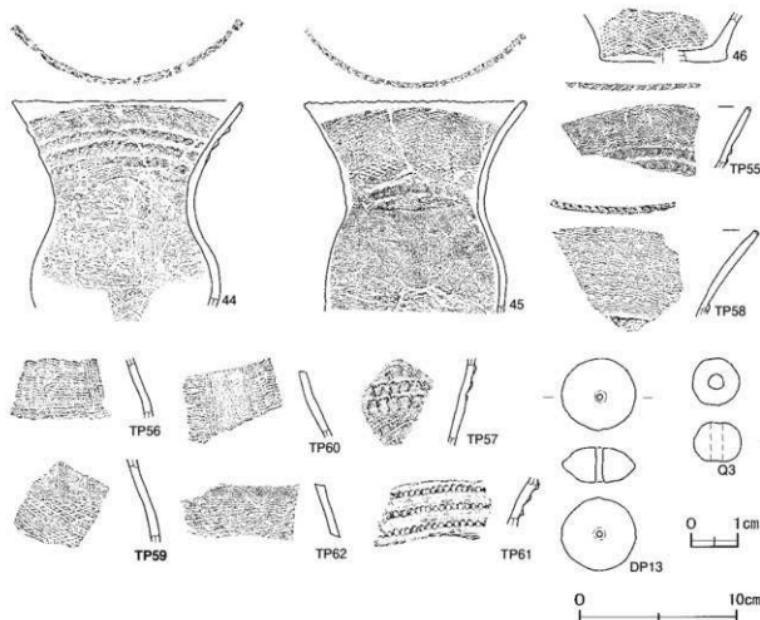
ピット番号	長径(cm) × 短径(cm)	深さ(cm)
1	40×38	16
2	34×28	10
3	46×41	15
4	56×52	14
5	25×21	54
6	17×16	29

表9 ピット群一覧表

番号	位置	範 囲		柱穴平面形	深さ(cm)	出土遺物	時期	備 考 新旧関係(旧→新)
		東西(m)	南北(m)					
1	A2g4	5.0	6.0	円形、椭円形	16~58	—	不明	SK26, SD3→本跡
2	A2e1	8.0	5.0	円形、椭円形	10~54	—	不明	

## (5) 遺構外出土遺物

今回の調査では、表土や確認面及び覆土中から、遺構に伴わない遺物が出土しているため、特徴的な遺物を実測図(第32図)及び観察表で掲載する。



第32図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第32図)

番号	種 別	器 横	口径	器 高	底径	胎 土	色 調	施 成	文 様・手 法 の 特 徴	出 土 位 置	備 考
44	弥生土器	広口壺	144	(13.0)	—	長石・雲母	にぶい・粗	普通	I型部上面に付加縦条網軋印(口辺部、側面)、側面に斜めの溝状施成。頭部に斜め・押印のある3本の隆起、輪廻状工具による横区画(5分割)内に光沢波状文、頭部下位に同工具による横走文	SI2 擾乱部	30%
45	弥生土器	広口壺	140	(13.4)	—	石英・長石・雲母	にぶい・黄相	普通	I型部上面に付加縦条網軋印(口辺部、側面)、側面に斜めの溝状施成工具(5本)による横区画(3分割)内に光沢波状文、頭部下位に同工具による下向き波状文	表様	30%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
46	弥生土器	広口壺	-	(3.2)	[8.0]	石英・長石・雲母	にぶい黄	普通	胴部・付加条二種文施文 底部砂目痕	表様	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP55	弥生土器	広口壺	石英・長石	灰褐色	普通	11号部上面上に付加糊を付軽い押圧 底部、櫛歯状工具(4本)による波状文 脇部上位に同じ工具による横走文	SD1 裏土中	
TP56	弥生土器	広口壺	石英・長石	にぶい黄橙	普通	頭部、櫛歯状工具(4本)による縦区画内充填波状文 頭部下位に同じ工具による横走文	SD1 裏土中	
TP57	弥生土器	広口壺	長石	にぶい黄橙	普通	頭部下位に軽い押圧のある3本の隆帯 脇部・付加条二種文施文	SD1 裏土中	
TP58	弥生土器	広口壺	長石・雲母	にぶい褐	普通	11号部上面上に付加糊を付軽い押圧 底部、櫛歯状工具(4本)による波状文 脇部上位に同じ工具による横走文	SD2 裏土中	
TP59	弥生土器	広口壺	石英・長石	にぶい褐	普通	頭部、櫛歯状工具(4本)による縦区画内充填波状文 頭部下位に同じ工具による横走文 織法・付加条一様純文施文	SD3 裏土中	
TP60	弥生土器	広口壺	長石	にぶい褐	普通	頭部、櫛歯状工具(4本)による縦区画内充填波状文	SD4 裏土中	織帶着
TP61	弥生土器	広口壺	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	頭部上位に櫛状工具による押圧のある3本の隆帯	SK9 裏土中	
TP62	弥生土器	広口壺	長石	にぶい黄橙	普通	頭部下位に櫛状工具(4本)による下向き連弧文及び波状文 脇部・付加条一様純文施文	表様	PL6

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP13	軽鍊車	47	22	0.5	41.4	石英・長石・雲母・赤色粒子	算盤玉形、丁寧なナダ、器面剥落	S12 複乱部	PL6

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	小玉	1.0	0.3	0.9	0.97	ガラス	表面は風化し、もろくなっている。	S12 複乱部	PL6

## 第4節 まとめ

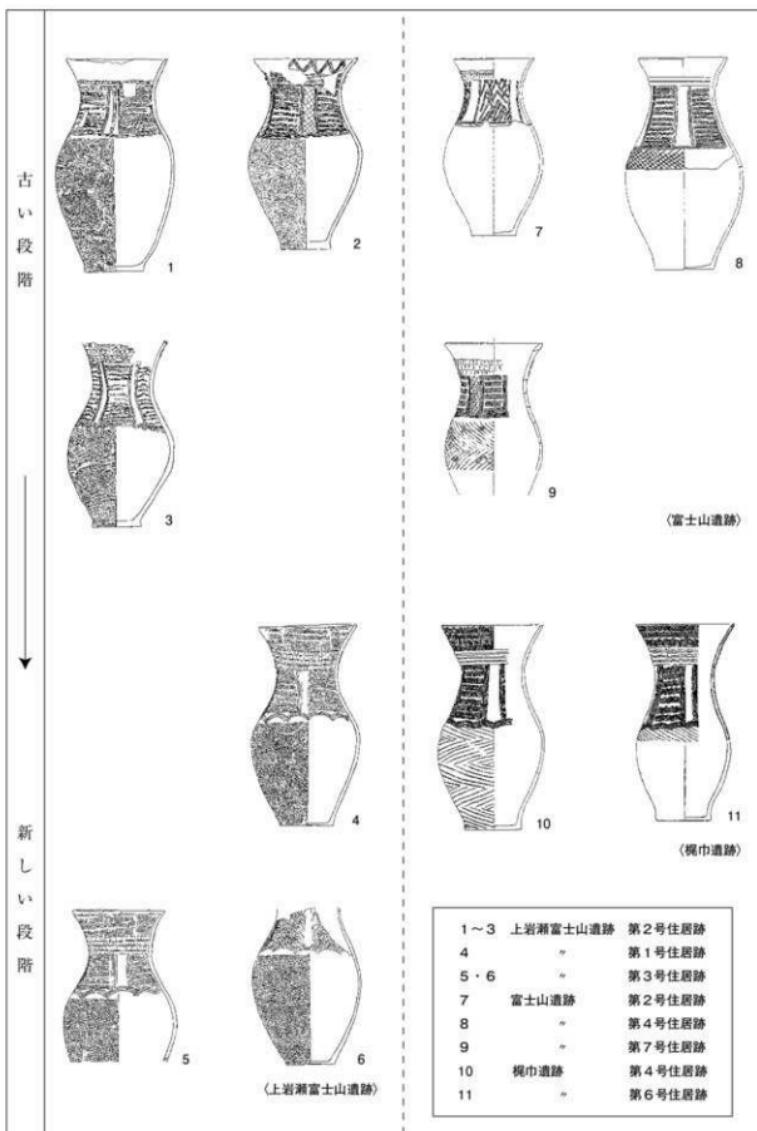
当遺跡は、久慈川と玉川に挟まれた標高46mほどの中位段丘上に位置しており、周辺にも多くの遺跡が確認されている。今回の調査では、縄文時代の陥穴1基、弥生時代の竪穴住居跡7軒・土坑3基・炉跡1基、時期不明の土坑24基・溝跡4条・柵跡2条・ピット群2か所が確認された。特に弥生時代後期後半の住居跡が重複関係で確認できたことは、土器編年を考察する上で、大切な資料であると考えている。ここでは、弥生時代の出土土器の様相及び周辺遺跡との対比を行い、当遺跡の性格について述べながら、まとめとしたい。

### 1 集落と出土土器について（第33図）

弥生時代後期後半に比定される住居跡から、十王台式土器が多量に出土している。土器は、広口壺が主体であり、高窓やミニチュア土器も出土している。第3・4号住居跡が重複関係で確認されたことから、この2つの住居跡出土の土器を中心に土器の様相と集落について考察してみたい。

#### (1) 重複住居跡の出土土器の特徴

住居跡の新旧関係は第3号住居跡が第4号住居跡を掘り込んでいることから第3号住居跡が新しく、第4号住居跡が古いことがわかる。第3号住居跡から出土した土器の特徴をあげてみると、口縁部には波状文が施され、隆帯は3~4本で軽い押圧が施されているものが主体で、頭部は櫛歯状工具により縦区画し、区画内には波状文を施している。頭部と胴部の区画は下向き連弧文で区画し、胴部は付加条二種の羽状縄文を施すものが多く、底部は砂目痕である。一方、第4号住居跡から出土した土器は、完形品が無く土器片からの観察は、口縁部には、山形文・波状文・付加縄二種による縄文を施され、隆帯は3本で軽



第33図 上岩瀬富士山、富士山、梶巾遺跡出土土器実測図

い押圧のものや棒状工具による押圧のものが見られる。頭部は櫛歯状工具により縦区画し、区画内には波状文・横走文を施している。頭部と胴部の区画は波状文・横走文・横走文と下向き連弧文の組み合わせのものによって区画され、胴部は付加条二種の縄文を施すものが多く、底部は砂目痕である。第4号住居跡の土器には大きな特徴は見られない。しかし、明らかに文様構成などから第3号住居跡の土器の様相とは違うことがわかる。

#### (2) 他の住居跡の出土土器の特徴

第3・4号住居跡をもとにした土器の特徴と時期の違いから、第3号住居跡と同じ特徴をもつ土器は、第1号住居跡出土のIがあげられる。口唇部には付加縄文で回転押圧が施され、口縁部には5本単位の櫛歯状工具による波状文、頭部上位には軽い押圧による4本の隆帯が巡り、頭部は櫛歯状工具により縦区画し、区画内には波状文を施している。頭部と胴部の区画は下向きの連弧文を施し、底部は砂目痕である。このことから第3号住居跡と第1号住居跡が同時期に存在していた住居であると考えられる。また、第4号住居跡と同じ特徴をもつ土器は、TP26と同じ山形文の土器があり第2号住居跡からも出土している。口縁部が無文や山形文で、2~3本の隆帯を巡らし、頭部文様帯及び胴部との区画の文様も多様であることがあげられる。第4号住居跡から同じ文様の土器が出土しているが、同時に波状文を施す土器片が出土していることから、第2号住居跡は第4号住居跡よりも古いということが分かる。

#### (3) 集落の変遷

現在、十王台式土器は5段階に細分化して検討されている。その中で広口壺の「中型中頭型」の変遷をもとに、十王台式土器を細分し、十王台式土器には、口縁部の段階的な拡幅と、施文の増加という変遷の過程が認められるとともに、頭部文様帯の画一化が見られることが指摘されている<sup>10)</sup>。ここで、第1~3号住居跡の出土土器の変遷に着目すると、口縁部の無文から波状文への変化と共に、頭部の縦区画内の文様も多様なものから波状文へ、頭部と胴部の区画も横走文から連弧文へという施文の変化に同様のことがいえる。この時期の土器様相に着目し検討をさらに加えていくことが、時期差を見分ける際の指標になることを裏付ける資料になるものと考える。以上のことから、第2号住居跡が古く第4号住居跡、第1・3号住居跡の順で集落が構成されたものと考える。また、第5~7号住居跡については遺物の量も少なく、完形品も少ないとから不明である。

## 2 遺跡と他地域の土器様相の比較（第33図）

#### (1) 当遺跡と富士山遺跡<sup>11)</sup>・梶巾遺跡<sup>12)</sup>との土器様相の比較について

今回調査をした台地の数百m南に富士山遺跡があり、住居跡9軒、土坑墓3基が確認されている。また、当遺跡から北7.5kmの久慈川右岸の標高64mの台地上に梶巾遺跡があり、住居跡2軒が確認されている。すでに両遺跡については報告書が刊行されており、土器編年についての詳細な検討が行われている<sup>13)</sup>。ここでは、当遺跡の出土土器と2つの遺跡の出土土器を比較してみたい。富士山遺跡からは口縁部が無文や波状文のもの、頭部と胴部との区画には横走文や横走文と連弧文の組み合わせによる施文が確認できる。当遺跡の第2号住居跡の土器が、富士山遺跡第2・4・7号住居跡の土器と文様構成が一致したり類似したりすることから同時期と考えられる。

また、梶巾遺跡から出土している第4・6号住居跡出土の広口壺は、口縁部に波状文、頭部上位に隆帯を施し、縦区画内に波状文、頭部と胴部を連弧文で区画する特徴をもっており、当遺跡の第3号住居跡出土の土器に相当する土器であると考えられる。ただし、梶巾遺跡から出土している広口壺の口唇部の施文

に着目すると、当遺跡から出土した土器が付加縄文による回転押圧のものが圧倒的に多いのに対してヘラ状工具による刻みや、縄文原体による押圧の土器が多く見られる。口唇部への付加縄文による回転押圧のものが見られないことから、集落の違いや多少の時間差がある可能性をもっている。以上のことから富士山遺跡が古い段階の遺跡であり、梶巾遺跡が新しい段階の遺跡であるといえる。このことは報告書<sup>11)</sup>の見解と一致している。土器の様相から、集落として考えたときに、第4号住居跡が廃絶され完全に埋まつた後に、次の集落の第3号住居跡がつくられたものと考えるならば、同じ集落が継続していた可能性は低いと考える。しかし、当遺跡が同じ台地上に生活を営み両遺跡の時期を合わせても集落であることは、この地域の弥生時代後期後半における地域の様相を解明する上で大変貴重な遺跡であると考える。

## (2) 他の地域と交流を示す土器について

第4号住居跡から出土したTP25は、肩の部分と考えられる広口壺の土器片である。文様は、胴部上位に6本単位の櫛歯状工具による波状文、さらに結節文と沈線による鋸歯状の区画内に縄文が施文され、その下位には結節文を施文する土器である。これらの文様構成は南関東系のものと考えられるが、櫛歯状工具による波状文が入っていることから南関東系の土器を真似てこの地域の人が作ったものと考えたい。類例としては土浦市原田北遺跡<sup>12)</sup>の第34号住居跡から、胴部上位に結節文と沈線による鋸歯状区画間に縄文が充填されている土器が出土しており、ほかにも南関東の土器をもつ地域と関係を示す土器が数多く出土している。しかし、当遺跡からは、これ以外に結節文を施文した土器片を数片確認するだけであるため、久慈川流域以南から持ち込まれた搬入品の可能性も考えておかなければならない。

第2号住居跡から出土しているIIは、他の広口壺と比べても重く、胴部が他の土器より厚い特徴を持っている。胎土は久慈川流域以北から多く検出される雲母を含んでいることから、他の地域からの搬入品というよりは在地のもので、壺の作り手が他の地域の工人であった可能性を示す土器と考えられる。口縁部の文様は確認できないが、頸部と胴部の区画に横走文と大ぶりの波状文を施文している点に着目すると、施文に上下の違いはあるが、潤沼前川右岸に位置している茨城町大畑遺跡<sup>13)</sup>の第1号住居跡の1・18や第11号住居跡の4、同町の矢倉遺跡<sup>14)</sup>の第12号住居跡の4・第24号住居跡の7に類例を見ることができる。

また、第3号住居跡から2つの突起をもつ片口の高环が出土している。口唇部にはヘラ状工具による刻みを施し、口縁部は折り返し口縁で、环部・脚部とともに内外面に丁寧なナデ・ヘラナテ整形をしている。片口をもつ高环の類例としては、富士山遺跡の第2・9号住居跡からそれぞれ出土している。いずれも口唇部は広口壺の特徴と同じ付加縄文原体による押圧で环部の外側には櫛歯状工具による文様が施文されている。同遺跡の第5号住居跡からは片口の形状を呈し、口唇部はヘラ状工具による刻みを施し、その両端に突起を持つ鉢形土器が出土している。突起と口唇部のヘラ状工具による刻みについての関係について他の類例を見てみると、那珂川流域<sup>15)</sup>や潤沼川流域<sup>16)</sup>の遺跡から突起をもつ十王台式土器の出土例が数多く報告されている。しかし、久慈川流域の富士山遺跡・梶巾遺跡などからはその類例は確認できない。突起については、福島県の天王山式の影響と捉えられており<sup>17)</sup>、地理的に近い久慈川流域にその影響が見られないのも不思議である。当遺跡において突起を持つ高环の出土は、潤沼川・那珂川との文化圈の違いがあることが推測されるとともに、その地域との交流関係を知る手がかりになると考えている。

## 3 緒び

弥生時代後期後半の上岩瀬富士山遺跡は、隣接する富士山遺跡と久慈川上流に位置する梶巾遺跡のそれぞれの時期に相当する集落跡である。しかし、継続して集落が営まれていたかについては今後の検討が必要で

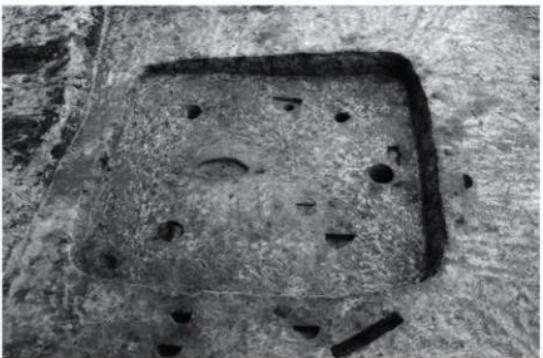
ある。重複している住居跡の出土土器の観察からは、今までの土器形式区分を実証する好資料になるものと考えられる。南関東の影響を受けた土器の出土からは、その方面との交流や、潤沼川・那珂川流域に住む人々との交流がうかがえる。今回は、土器の様相を中心に検討したが、様々な器形や文様を持つ高杯や筋鉢車についても検証することで上岩瀬富士山遺跡の性格にさらに迫ることができると考えられる。今後は資料の増加を待ち、久慈川流域における弥生時代後期後半の人々の暮らしの様子について解明していきたい。

#### 註

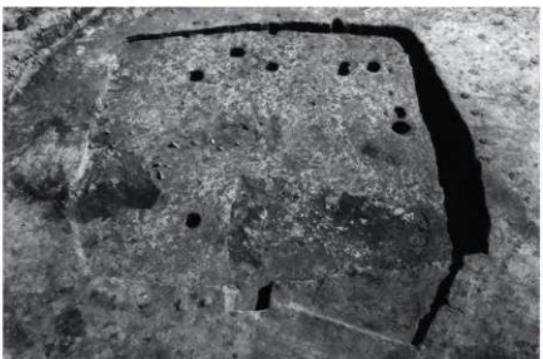
- 1) 鈴木素行 「武田石高遺跡における十王台式土器の編年について－「十王台式土器」分析のための基礎的な作業－」「武田石高遺跡 旧石器・绳文・弥生時代編」（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第15集 1998年3月
- 2) 井上義安ほか 「富士山遺跡調査報告書Ⅰ」大宮町教育委員会ほか 1979年3月
- 3) 井上義安ほか 「茨城県祝中遺跡 大賀小学校校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」大宮町教育委員会ほか 1985年3月
- 4) 緑川正實・海老澤稔 「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 原田北遺跡Ⅱ 原田西遺跡」「茨城県教育財团文化財調査報告第80集」 1994年3月
- 5) 長谷川聰 「北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大作道路 大畑道路」「茨城県教育財团文化財調査報告第136集」 1998年3月
- 6) 飯島一生 「北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡 後口原遺跡」「茨城県教育財团文化財調査報告第135集」 1999年3月
- 7) a 井上義安ほか 「鉢釜 鹿島線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」大洗地区発掘調査会 1980年3月  
b 井上義安ほか 「团子内 一五反田地区画整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査概要」大洗地区团子内遺跡発掘調査会 1987年3月  
c 鈴木素行 「半分山遺跡」（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第30集 2004年3月
- 8) a 前掲7) と同じ  
b 前掲8) と同じ  
c 田中幸夫 荒井克一郎 「綱山遺跡 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財報告書Ⅵ」「茨城県教育財团文化財調査報告第243集」 2005年3月  
d 村上和彦 「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財報告書Ⅰ 石原遺跡」「茨城県教育財团文化財調査報告第163集」 2000年3月  
e 近藤恒重 「大戸下郷遺跡 主要地方道内原塙崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」「茨城県教育財团文化財調査報告第216集」 2004年3月
- 9) 鈴木正博 「「十王台式」理解のために(1) - 分布図西部地域を中心として-」「常総台地」第7号 常総台地研究会 1976年
- 10) 鈴木正博 「「十王台式」理解のために(3) - 前号の追加 1とリュウガイIV群 a類土器について-」「常総台地」第8号 常総台地研究会 1976年

写 真 図 版





第1号住居跡  
完掘状況



第2号住居跡  
完掘状況



第2号住居跡  
遺物出土状況



第2号住居跡  
遺物出土状況



第3号住居跡  
完掘状況



第3号住居跡  
遺物出土状況



第3号住居跡  
遺物出土状況



第3号住居跡  
遺物出土状況



第4号住居跡  
完掘状況

PL 4



SI 2-12



SI 2-16



SI 2-11



SI 1-1



SI 2-9

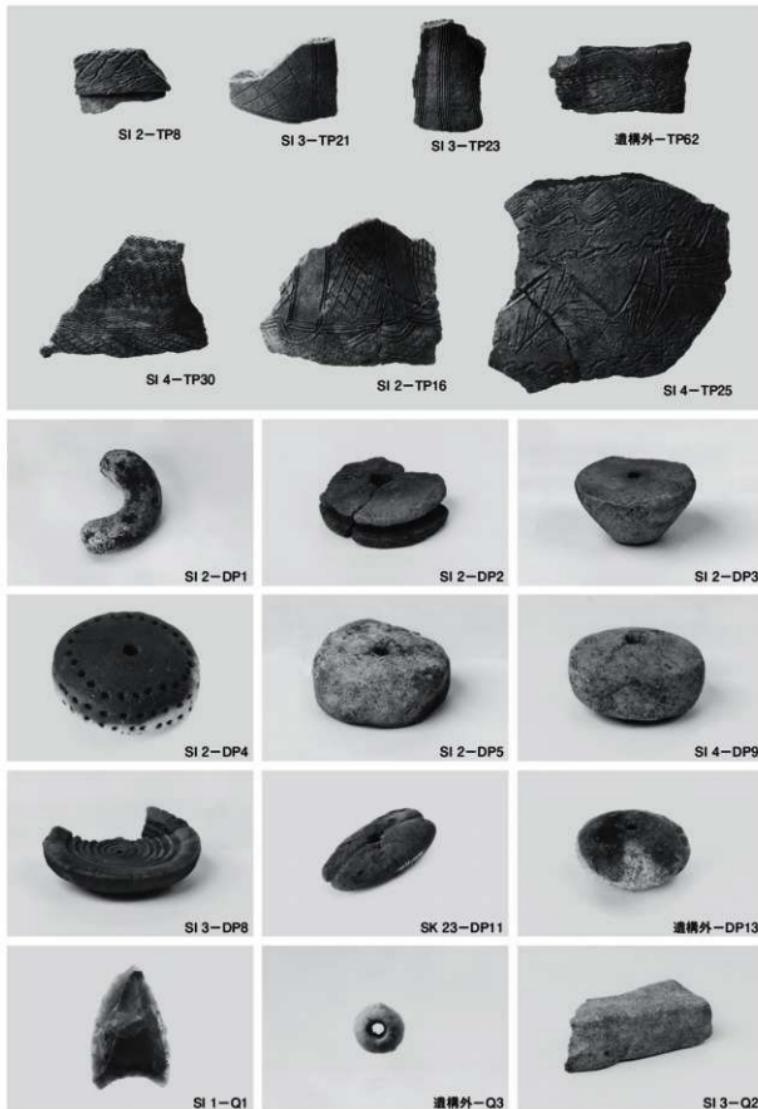


SI 2-10

第 1 · 2 号住居跡出土遺物



第2・3・4・6号住居跡出土遺物



第1～4号住居跡、第23号土坑、遺構出土土器・土製品・石器・石製品

茨城県教育財団文化財調査報告第260集

上岩瀬富士山遺跡

17国補道改第17-03-068-0-053号

埋 藏 文 化 財 調 査 報 告 書

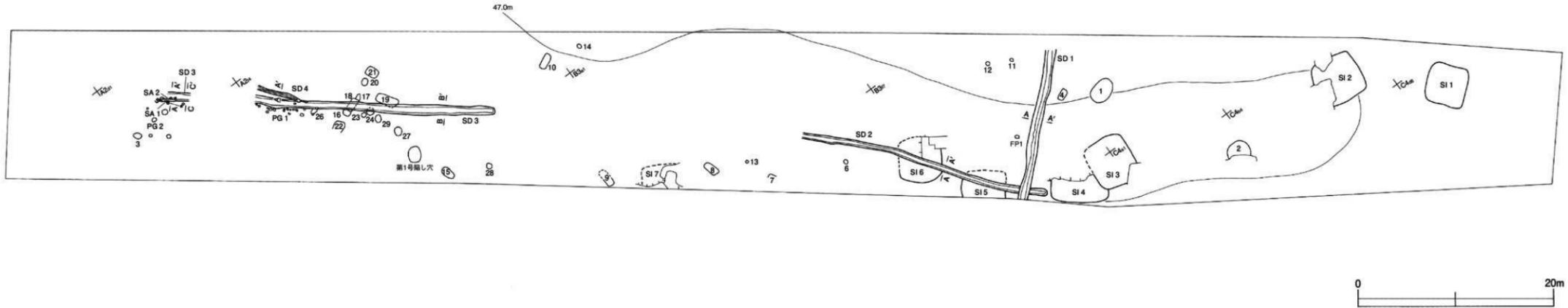
平成18（2006）年3月20日 印刷

平成18（2006）年3月24日 発行

発行 財團法人 茨城県教育財団  
〒30-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587

印刷 富士オフセット印刷株式会社  
〒30-0067 水戸市根本3丁目1534-2  
TEL 029-231-4241㈹





付図 上岩瀬富士山遺跡遺構全体図

「茨城県教育財団文化財調査報告第260集」